

INFINITE
STRATOS
IS1

インフィニット・ストラトス1

弓弦イズル
YUMIZURU Izuru

Illustration: CHOCO



弓弦イズル
YUMIZURU Izuru

Illustration: CHOCO

OVERLAP

第一話「クラスメイトは全員女」

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」
ショートホームルーム

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）。身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだばっとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんとというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「……………」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよつとろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

3

第一話

クラスメイトは全員女

61

第二話

クラス代表決定戦！

130

第三話

転校生はセカンド幼なじみ

193

第四話

決戦！ クラス対抗戦
リーグマッチ織斑一夏 おりむら・いちか世界で唯一ISを動かせる男子。
専用IS [白式]

ICHIKA ORIMURA

篠ノ之箒 しのの・ほろき6年ぶりに再会した幼なじみ。
専用ISなし

HOUKI SHINONONO



セシリア・オルコット

イギリス代表候補生
専用IS [ブルー・ティアーズ]

CECILIA ALCOTT

風鈴音 ファン・リンイン中国代表候補生
専用IS [甲龍]

LINGYIN HUANG

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

（これは……想像以上にきつい……）

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。

俺はちらりと窓側の方に目をやる。

「……………」

何かしらの救いを求めての視線だったんだが、薄情なことに幼なじみの篠ノ之箒はふいっと窓の外に顔をそらした。なんてやつだ。これが六年ぶりに再会した幼なじみに対する態度だろうか。……いや、もしかして俺嫌われてるんじゃないか？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

別に俺は女子に対する苦手意識はない。ないけど、でも限度つてものがあるだろう。ラーメン好きだって毎日三食ラーメンだったら三日で飽きるだろう。いや、わからんけど。俺そ

こまでラーメン好きじゃないしなあ……って、そういう話じゃない。

ともかく、クラスで男は俺だけ。他の生徒二十九名が女子。副担任も女性。担任は……知らないけど、女性らしい。らしいというのは未だに顔を出さないからだ。何してるんだろうね。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始めて今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

気がつく副担任の山田真耶先生がペこぺこ頭を下げていた。しかしあんまり頭を何度も下げるので、微妙にサイズのあつてなさそうな眼鏡がずり落ちそうになっている。そしてまた俺はそういうどうでもいいところばかり気になっていた。というかこの人は本当に年上なんだろうか。同い年といわれれば受け入れてしまいたい。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。……あの、またすごい注目を浴びているんですが。

しかしまあ、すると言った以上、男子たるもの引くわけにもいかない。それにより、最初で溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た。

しっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ……)

今まで背中に感じていただけの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する。なにせさつき薄情にも俺を見捨てた筈でさえ横目でこっちを見ている。

さすがにこんな風に注視されると、いくら女子に苦手意識のない俺だったたじろぐ。いくらカレール好きだって——いや、もうその話はいい。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

儀礼的に頭を下げて、上げる。——ちよっと待て、なんだその『もっと色々喋ってよ』的な視線は。そしてこの『これで終わりじゃないよね?』的な空気はなんだ。

そんなに喋ることないぞ。無趣味って訳じゃないが、別に万人に聞いてほしいってほどでもないし、だいたい初対面でいきなりそんな趣味の話とかされたら困らないか? 俺、いきなり自己紹介でサボテンの飼育と株分けが趣味です! って女子いたら軽く引くぞ。

ちなみに俺の趣味はサボテンの飼育と株分けではない。念のため。

「……………」

だからだと背中に流れる汗を感じる。どうしたらいい、何を言えればいいんだ。というか、何で俺ここにいるんだ——?

「うー、寒っ……」

二月の真ん中、俺は中学三年。受験のまったただ中だった。

「なんで一番近い高校の、その試験のために四駅乗らなきゃいけないんだ……。しかも今日、超寒いじゃねーか……」

昨年起きたカンニング事件のせいで各学校が入試会場を二日前に通知するという政府のお達しはそりゃあ無茶苦茶なんだが、何せ俺はただのどこにでもいる中学三年。何を言えるというのか。せいぜいこうやって愚痴りながら試験会場に向かうのが関の山だ。

俺が受けようと思っっているのは、自宅から近い・学力真ん中・学園祭が毎年あるという私立藍越学園。

特に何が良いかというと、私立なのに学費が超安い。格段に安い。

なぜか。簡単だ。この学園の卒業生の進路、その九割が学園法人の関連企業に就職するからだ。

一時期の就職氷河期と呼ばれた時代ではないにせよ、卒業後の進路までケアしてくれるというのがあるがたい。

しかも優良企業が多いのがまたいい。そして地域密着型。ある日突然僻地に飛ばされる心配も皆無。すばらしい。

「いつまでも千冬姉の世話になってるわけにもいかなないしなあ……」

うちはまあ、ちよっとした事情で両親がいない。年の離れた姉が養ってくれているが、正直なところ長年そのことには引け目を感じている。

辛い、千冬姉の稼ぎがいいから貧乏ではないけれど、それがまた無理をさせているようで心苦しい。

本当は中学を出てすぐ働きたかったのだけれど、姉の力——主に腕力——には勝てず、現在受験生というわけで。

でもまあ、この私立藍越学園に受ければ就職も決まったも同然。千冬姉に楽をさせてやるというものだ。——まあ、本人が楽をしたいかどうかじゃなく、俺がそうしたいからするだけなんだけども。

「……先のこととはとりあえず受かってから考えよう」

この一年の猛勉強のおかげもあって模試での判定はA。普通に受ければ普通に受かるはずなので、俺はたいした緊張もなく会場に入る。場所は名前だけは知っているけどどこにあるか知らないという典型的な公共事業の産物こと多目的ホール。私立が市立の施設を借りるというのもおかしな話なんだが、そこはまあ地域密着型というアレだ。大人のアレコレだ。

「えーと……あれ？ これ、どうやって二階に行くんだ？」

いかん、迷った。というか、なんて分かりにくい構造をしているんだ。設計は地域出身のデザイナーに頼んだらしいが、それもまた地域密着型なのだった。

「しかしこの、『常識的に作らない俺カッコイイ』的な感じはなんなんだ……。階段はどこにあるんだよ……」

真剣に、迷路だよと言われれば騙されるレベルだ。なんでこんなに分かりにくい上に案内図がないのか。あの一面ガラス張りの廊下は空調効率落ちるだけじゃないのか？ この意味なく壁に貼られたタイルは地震のとき危険じゃないのか？ あの埋め込み型の照明はランニングコストかかるんじゃないのか？ というか交換しづらくないか？ 無駄に天井高いし。うーん……。

「……………」

中学三年にもなって迷子。——ダメだ、恥ずかしすぎる。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

おっと、いいところにドアが。ちょっと入りますよ？

「あー、君、受験生だよ。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいっつらなわ。まったく、何考えて……」

部屋に入った途端、神経質そうな三十代後半の女性教師に言われる。どうも相当忙しいのか、その忙しさを判断能力が鈍っているのか——おそらくその両方——、俺の顔も見ずにはっぱつと指示だけして出て行った。

（着替え？ はて、今日日の受験は着替えまでするのか？ ああ、カンニング対策か。大変だなあ、どこの学校も）

そう思ってカーテンを開けると、奇妙な物体が鎮座していた。

なんていうか、『お城に飾ってある中世の鎧』だ。しかも、忠誠を誓う騎士のようにひ

ざまざましている。

厳密には細部が甲冑かこうとは違うし、たぶん人によっては鎧よろいという印象は受けられないだろうけれど。とにかく、それに似た印象の『何か』が置いてあった。

それは人型に近いカタチをしていて、使用されるときをただ黙って待っている。

——知っている、これは、『I S』だ。

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

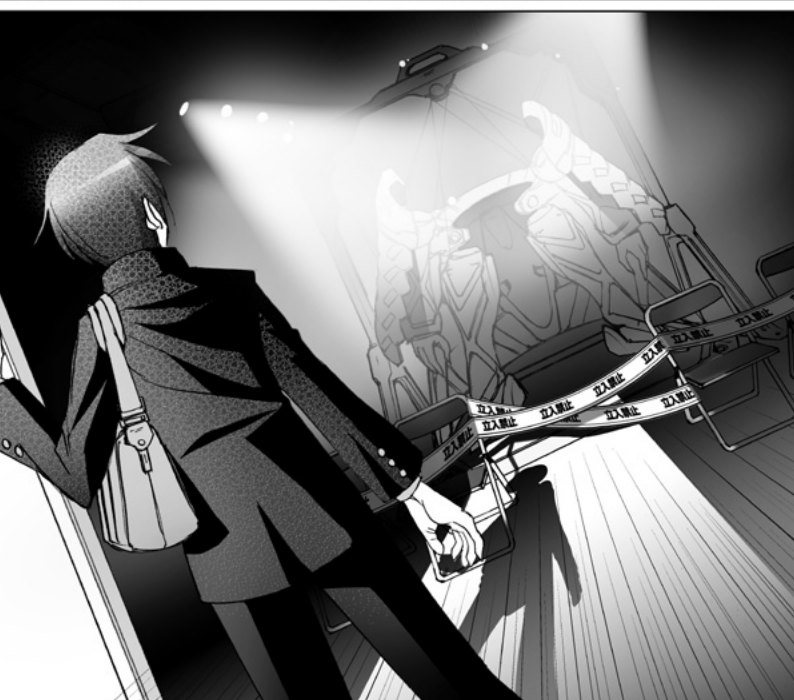
しかし『制作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持ってあました機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた——所謂、飛行パワードスーツだ。

しかしこの『I S』には致命的な欠陥があって、そのことから俺にとっては何の意味もなさない。

「男は使えないんだよな、たしか」

そう、女にしか使えない。女以外には、この機械は反応しないのだ。

だから、今目の前にあるのはマネキンと同じだ。何もしない、できない、ただの物体だ。——そう思って、触れた。



「!?」

キンツと金属質の音が頭に響く。

そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。数秒前まで知りもしなかった『IS』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、etc……。

まるで長年熟知したもののように、修練した技術のように、すべてが理解、把握できる。そして視覚野に接続されたセンサーが直接意識にパラメータを浮かび上がらせ、周囲の状況が数値で知覚できる。

「な、なんだ……?」

動く。動くのだ。『IS』が。それも自分の手足のように。

肌の上に直接何かが広がっていく感触——スキンパリアーアクトン皮膜装甲展開、……完了。

突然体が軽くなる無重力感——スラスタク推進機正常作動、……確認。

右手に重みを感じると、装備が発光して形成されていく——近接ブレード、……展開。

世界の知覚精度が急激に高まる清涼感——ハイパーセンサー最適化、……終了。

それらすべてがわかる。知りもしないのに、習ってもいないのに、わかる。

そして『IS』から送られてくる情報で見る世界は、まるで——

「……………」

——えと。

状況を再確認するぞ。今俺は高校一年、入学式当日。自己紹介の真っ最中。目の前に広がるのは二十九名の女子。後ろには、たぶん半泣きの山田先生……ところで山田先生って下から読んでも上から読んでも『ヤマダマヤ』だな。うん、いい名前だ。覚えやすい。どうでもいい閑話休題終わり。

で、自己紹介を終わるに終われない俺。何せ目の前の女子は『もっと聞きたいなあ!』という期待に満ちた視線を俺に送り続けている。

おい、帯、幼なじみのよしみで助けてはくれまいか。——あ、また目そらしやがった。薄情者め。感動の再会はどうした。そんなのないけど。

(いかん、マズイ。ここで黙ったままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう)俺は呼吸を一度止め、そして再度息を吸い、思い切って口にした。

「以上です」

「あ、あの……」
がたたっ。思わずすっこける女子が数名いた。どんだけ期待してるんだよ。無茶言うな。

背後からかけられる声。涙声成分が二割増している。え? あれ? ダメでした? パアンツ! いきなり頭を叩かれた。

「いっ——!？」

痛い、と言う脊髄反射より、あることが頭をよぎった。

この叩き方——威力といい、角度といい、速度といい、とある人物——よく知っている
とある人物が同じような感じなのですが……。

「……………」

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛え
られているがけて過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。

「げえっ、関羽!？」

パアッ! また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。その音があまりにも大きいから、

見ろよ女子が若干名引いてる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者!？」

トーン低めの声。俺にはすでにドラの効果音が聞こえているんですが、はて。

——いやしかし、待て待て待て。なんで千冬姉がここにいるんだ? 職業不詳で月一、

二回ほどしか家に帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

おお、俺は聞いたこともない優しい声だ。関雲長はどこへ? 赤兎馬に跨って去ったの

か、劉備の許へ?」



「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはししないと……」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田真耶先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応えている。あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとこの暴力宣言。間違いなくこれは俺の姉・織斑千冬。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャ————！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

いや別に南北海道でもいいけどさ。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいですよ！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きやいきやいと騒ぐ女子達を、千冬姉はかなりうっとうしそうな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズでなく、本当にうっとうしがってるのが千冬姉だ。千冬姉、人気は買えないんだぜ？ もうちよっと優しくしようぜ。

と思った俺が甘かった。御坂神社の甘酒（というかあれはただの砂糖汁だ）くらい甘かった。五反田食堂のカボチャの煮物くらい甘かった（あれは改善を断固要求する）。天津甘栗——は特筆するくらい甘くもないか。そうか。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

しかし俺も自分のクラスの担任が千冬姉だったことに混乱と驚愕している——はずだったんだが、先刻の女子の黄色い声で逆に落ち着いた。自分より強い感情が近くにある人は相対的な意識が働いて落ち着くらしい。その通りだなと身をもって知った。

「で？ 挨拶も満足にできないのか、お前は」

辛辣 しんらつ——極めて手厳しいという意味。まさに俺にかけた実の姉の言葉はそれだった。

「いや、千冬姉、俺は——」

パンツッ！ 本日三度目。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

——と、このやりとりがまずかった。つまり、姉弟なのが教室中にバレた。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあ。代わってほしいなあ」

最後のは放っておくとして、一応言っておこう。

俺は今、世界で唯一『IS』を使える男としてここ、公立IS学園にいる。

IS学園というのは、

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。——IS運用協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋。

という学園なわけだ。

わかりやすく言うと、『てめー、日本人が作ったISのせいで世界は混乱してるから責めもって人材管理と育成のための学園作れや。その技術はよこせや。あ、運営資金は自

分で出してね』ということ。ヤクザだな、某A国。

(で、なんで俺がその学園にいることになったか……というのは、アイエヌス IS学園の試験会場でテスト用ISを動かしたからなんだけど、そもそもなんでそこに行ったかかっていうのは……)

——あいろ 藍越学園とIS学園って、似てるよな？ つまり、そういうこと。

「……………」

ふと、まだ興奮冷めやらぬ教室内から、低温の視線を感じる。

見ると、さっきまで窓の外に視線を向けていたほうき 箒がこっちをそれとなく見ていた。

(うーん、なんだ？ 怒ってるようにも見えるけど……俺なんかしたか？)

まあ、あとで聞いてみよう。

そんなことを思っていると、チャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなって返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

おお、なんとという鬼教官。目の前の姉は人の皮をかぶった悪魔だろうか。いや悪魔の方がまだ融通が利く。あいつら人間じゃないから。目の前の人間、なまじ人間性能の限界を知っているからタチが悪い。

なにせこの織斑千冬、第一世代IS操縦者の元日本代表なのだ。しかも公式試合の戦歴

は無敗。ところがある日突然、引退して姿を消す——ってどうか、学園の教師してたのかよ……家族の俺にくらい言えよ……心配した俺が馬鹿だった。

「席に着け、馬鹿者」

はいはい、馬鹿ですよ。



「あ………」

参った。これはマズイ。ダメだ。ギブだ。

「……………」

一時間目の I S 基礎理論授業が終わって今は休み時間。けれど、この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。

ちなみに、I S 学園ではコマ限界まで I S 関連教育をするため、入学式当日から普通に授業がある。学内の案内？ 地図を見ろっさ。

（だがしかし、どうにかならないのかこれは……）

俺以外が全員女子。それはクラスだけではなく、学園全体がそうなのだ。

ちなみに『世界で唯一 I S を使える男』というのは世界的にもニュースになったらしく、当然学園関係者から在校生までみんな俺のことを知っている。

というわけで現在、廊下には他クラスの女子、二、三年の先輩らが詰めかけている。しかし女子だけの空間に馴染んでしまっているのか、なかなか俺に話しかけると言うことはない。それはクラスの女子も同じで、『あなた話しかけなさいよ』という空気と『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』的な緊張感が満ちている。

ちなみに I S 学園は世界でここ一カ所しかないのだが、ここに入学するための事前学習として I S 学習を授業に組み入れている学校は多い。

そしてその学校は百パーセント女子校。つまり、この学園の女子はほとんどが男子に免疫がないわけで、しかも世の男というのは非常に今辛い立場にある。

—— I S が発表されてから今年で十年になるが、世界は激変した。

現行の戦闘兵器は I S の前ではただの鉄クズに等しく、それ故に世界の軍事バランスは崩壊。しかも開発したのが日本人だったので、日本は独占的に I S 技術を保有していた。

当然危機感を募らせた諸外国は I S 運用協定——通称『アラスカ条約』によって I S の情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止などが決められた。

そうすると、今度は I S 操縦者がどれだけ揃っているかという点、即その国の軍事力（正しくは有事の際の防衛力）へと繋がる。そして操縦者は当然女……となると、どの国も率先して女性優遇制度を施行した。

これによって『女≠偉い』という構図はあつという間に浸透し、この十年で女尊男卑社会の完成というわけだ。

そこに突然対等の立場の『男』が現れると、当然まず第一に好奇心が湧くというわけ
 ……。

（そして、今の状況なわけだが）

ちらっと隣の女子を見ると、それまで俺に向けていた視線を慌ててそらす。しかも「話
 しかけて！」という雰囲気はそのままだ。

しかも、元日本代表で全国の女子の憧れ、織斑千冬の弟というプロフィールまでつくと、
 ますます話はややこしい。

（誰かこの状況を助けてくれ……）

ふと、旧友の五反田のことを思い出す。あいつはうらやましいとずっと言っていたが、
 どこがだ。今からでも遅くはない、代わってくれ。

「……ちょっといいか」

「え？」

突然、話しかけられた。女子同士の牽制けんせいに競り勝ったのだろうか？……いや、今教室内
 外に広がっているざわめきを考えると、どうも一人思い切って行動に出たようだ。

「……箒？」

「……………」

目の前にいたのは、六年ぶりの再会になる幼なじみだった。

篠ノ之箒。俺が昔通っていた剣術道場の子。髪型は今も昔も変わらずポニーテール。肩



下まである黒い髪を結ったリボンが白色なのは、やっぱり神主の娘だからだろうか（篠ノ之道場は神社兼任）。

身長は平均的な女子のそれだが、長年剣道で培った体はどこか長身を思わせる。少し不機嫌そうに見える目は生まれつきと本人曰く。……いや、俺が嫌われてる可能性もゼロではないけど。実際、今し方名前で呼んだら睨まれたのは錯覚ではないはず。

どこかしら日本刀を思わせる印象、それが俺の思っていた箒だったんだが、それは空白の六年で鋭さを増した気がする。

「廊下でいいか？」

教室では話しにくいことなんだろうか。まあ、俺も今の状況から抜け出せるならなんでもいい。やはり持つべき者は幼なじみだ。薄情なんてとんでもない。言っただけは即時謝るように。あ、俺か。

「早くしろ」

「お、おう」

すたすたと廊下に行ってしまう箒。そこに集まっていた女子がざあつと道を空ける。モーゼの海渡りかよ。

それでまあ廊下に出たんだが、俺と箒から四メートルほど離れた包囲網が完成しているだけだった。しかも全員聞き耳を立てているのをひしひしと感じる。教室内で喋っても同じだな、こりゃ。

「そういうえば」

「何だ？」

ふと思いついたことがあって、俺から話を切り出した。というか箒よ、廊下にまで移動させておいて自分から話しかけないっていうのは新しすぎるだろ。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………」

箒は俺の言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた。……え？　なんで怒ってんの？　褒めたのに。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見だし……」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

何を言ってるんだ、箒は。意味がわからない。新聞くらい好きに読ませろよ。あと、久しぶりに聞いたけど、口調がなんか男っぽいというか、サムライって感じだな、相変わらず。

「あー、あと」

「な、何だ!？」

「……………」

「あ、いや……」

さすがに自分の剣幕に気づいたのか、ばつが悪そうにする箒。しかし妙に興奮してるな。

不思議なやつだ。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ」

「え……」

「ほら、髪型一緒だし」

そう言っただけで、俺が自分の頭を指さすと、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。

「よ、よくも覚えてるものだな……」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」

「……………」

ギロリ。また睨まれた。えー、なんで？

キーンコーンコーンコーン。

おっと、時間切れだ。二時間目の開始を告げるチャイムで、それまで俺と箒を遠巻きに見ていた包囲網も自然と瓦解する。さながらそれは蜘蛛の子を散らすように。……うん、さすがはIS操縦者、行動が機敏だ。

「俺たちも戻ろうぜ」

「わ、わかっている」

ぶいっと俺から顔をそらし、また来たときと同じようにすたすた歩き出す箒。どうやらこの幼なじみは俺を待つ気はないらしい。六年の歳月はこうも人を変えるのか。——いや、

うそ。箒は昔からこんな感じだ。

初志貫徹、日進月歩、日々鍛錬、頑固一徹。篠ノ之箒といえば、そういう言葉が男子よりよく似合う女子。小学校の頃から変わってない。

（個人的には臨機応変とか、その辺も少しは入れてほしいところなんだが——）

「……………」

またギロリと睨まれた。いかん、俺の考えがバレたのかもしれない。箒は、こと自分の悪口に関しては昔から鋭い。——いや、悪口じゃないけど。あくまで俺の希望だけであった。てだな。

パァンッ！

「とっとと席に着け、織斑^{おりむら}」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

俺の脳細胞は午前中だけで二万個死んだ。



「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。しかし、俺は全くついて行けなかった。

「……………」
 どっかりと積まれた教科書五冊。その一番上のものをぱらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。

「お、俺だけか？ 俺だけなのか？ みんなわかるのか？ このアクティブなんちゃらとか広域うんたらとか、どういう意味なんだ？ というかこれ、まさか全部覚えなないといけないのか……………」

ちらっと隣の席の女子を見ると、山田先生の話に時々うなずいてはノートを取っている。（ぐ…………）。しかしこの I S 学園に入るやつって事前学習してるっていうのは本当なんだな…………）

I S 操縦者が国防力に直結する昨今、いわばこの学園はエリートを育てるための機関だ。そして入学試験でものごい倍率を勝ち上がって来た優等生でもある。

（エリートには興味が無いが…………うーん、このままではいかん。要勉強だ）

かなりの劣等感に頭をたれながら、俺はついてきばきノートに記入していく女子を注視してしまっていた。

「な、なに？」

案の定、視線に気づいた女子が驚いたような緊張しているようなその上なにか期待しているような、引きつった作り笑顔で聞いてきた。

「あ、いや。何でもないんだ。ゴメン」

「そ、そう」

俺の言葉を聞いて、ホッとしたようながっかりしたような表情を浮かべてノート記入に戻る女子。…………うーん、俺は何か嫌われるようなことをしたんだろうか。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

俺と隣の女子のやりとりに気づいた山田先生が、わざわざ訊^きいてきた。

「あ、えっと…………」

開いている教科書にもう一度視線を落とす。——うん、全部わからん。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへんとも言いたそうに、胸を張る山田先生。おお、もしかしたら頼れる先生なんだろうか、よし訊いてみよう。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた返事。いいぞ、この人はさすが先生だ。

「ほとんど全部わかりません」

素直に自分の弱さを吐露。そうした方が多くの場合、受け入れてもらえるものだ。

「え…………。ぜ、全部、ですか…………？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。…………あれ？ 頼れる先生はどこに？ 「え、えっと…………織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいます

か？」

拳手を促す山田先生。

シーン……。

あれ、おかしいな。誰も手を挙げない。最初でつまずいたまま進むと、絶対あとから後悔するぞ。いいのか、それでいいのか、みんな！

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で控えていた千冬姉が訊いてくる。よし、俺は素直に答えよう。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

また俺の中の脳細胞俺が五千人死んだ。ちくしょう、葬儀屋が儲かるわけだ。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

ギロツと俺を睨む目は鬼軍曹とかそういうのを超えていた。悪魔だ、悪魔の皮をかぶった人だ。同じ人間である分タチが悪い。どうすれば人が苦しむか熟知してるもんな。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を

深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

はい、正論です。

でも一つだけ言わせてもらおうと、俺は希望してここにいるわけじゃない。

ある日黒服の男達がやってきて、『君を保護する』とか言って、IS学園入学書を置いていったんだ。意味がわからない。保護するっていうのはあれか、女の園にひとり男を放り込むことなのか？俺は今のこの状況から保護してほしい。主に千冬姉の腕力から。

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

ギクリ。なんでバレたんだ。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

相変わらず辛辣だ。つまり、現実と直面しろって言ってるんだよな。千冬姉、昔から超

現実主義だもんな。理由はわかるけど。

「……………」

ふう。——やるしかないか。

せめて、千冬姉に恥をかかせないくらいにはやれないと、職場で肩身の狭い思いをさせてしまおうし。

俺は家族を見捨てない。顔も知らない両親とは違う。

「え、えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、がんばって？ ね？ ねっ？」

山田先生が両手をぐっと握って詰め寄ってくる。俺より身長が低いから、必然的に上目遣いになっていた。

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願ひします」

それだけ言って、席に着く。千冬姉も教室の端に戻っていった。

「ほ、放課後……放課後にふたりきりの教師と生徒……。あつ！ だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから……それに私、男の人は初めてで……」

いきなり頬を赤らめてそんなことを言い出している。山田先生、大丈夫なんだろうか。IS操縦者って本当に男に免疫ないんだな。というか周囲の視線が痛い。視線に物理的な干渉力があつたら俺は蜂の巣だ。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……」

「あー、んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

一向に妄想から帰ってこない山田先生を、千冬姉の咳払いが呼び戻す。

山田先生は慌てて教壇に戻って——こけた。

「うー、いたたた……」

(……大丈夫か？ この先生……)

果てしなく前途が多難な気がする俺だった。

「ちよっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、またしても針のむしろを味わうかと思っていた俺は、いきなり声をかけられて素っ頓狂な声を出した。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺を見ている。

わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中、ISのせいで女性はかなり優遇されている。優遇どころか、もはやいきすぎた女に偉いの構図にまでなっている。そうなると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今じゃ町中ですれ違っただけの女にパシリをやらされる男の姿なんて珍しくもない。

つまりそういう、いかにも現代の女子が目の前にいた。腰に当てた手が様になっているあたり、実際いいところの身分なのかもしれない。

ちなみにこのIS学園では無条件で多国籍の生徒を受け入れなくてはいけないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。むしろ、クラスの女子の半分がころうじて日本人というだけだ。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

俺がそう答えると、目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

正直、この手合いは苦手だ。

ISを使える。それが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてIS操縦者は原則女しかない。

だからといって、その力を振りかざすのは違うだろう。力が粗暴なら、そんなものはただの暴力だ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

実際、知らない。なんか自己紹介で色々言っていた気がするが、正直覚えていない。千冬姉が担任だったことの方が百倍ショッキンダだった。

しかしどうもその答えは、目の前の女子（いい加減名前を覚えてくれると助かる）にとってはかなり気に入らないものだったらしい。吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、

入試首席のこのわたくしを!？」

ああ、名前セシリアっていうのか。ふーん。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に^{こた}えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

すごい^{けんまく}剣幕だった。マンガだったら血管マークが三つはついてそうだな。

「おう。知らん」

知らないことは素直に言おう。見栄は身を滅ぼす。

「……………」

セシリアは怒りが一周して逆に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

失礼な、テレビくらいあるぞ。見ないけど。

「で、代表候補生って?」

「国家代表 I S 操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そういうわれればそうだ」

簡単なことほど見落としやすいって本当なんだな。

「そう! エリートなのですわ!」

おお、復活した。さすがは代表候補生。

びしっと俺に向けた人差し指が、鼻に当たりそうなくらい近かった。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿ばかにしていますの?」

お前が幸運だって言ったんじゃないか。

「大体、あなた I S について何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男で I S を操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも? わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげ

ますわよ」

おお、この態度が優しさなのか。十五年生きてきてはじめて知ったぜ。

「I S のことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、をものすごく強調された。——って、ん?

「入試って、あれか? I S を動かして戦うってやつ?」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ? 俺も倒したぞ、教官」

「は……?」

確かそうだ。倒したっていうか、いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけだが。

しかし俺が言ったことは相当ショックだったのか、セシリアは目を驚きに見開いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたか?」

「女子ではってオチじゃないのか?」

ピシッ。あ、何かいやな音だ。氷にヒビが走ったような、そういう音が聞こえた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」

「いや、知らないけど」

「あなた! あなたも教官を倒したって言うの!?!」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!? たぶんってどういう意味かしら!」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キーンコーンコーンコーン。

話に割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。今の俺には福音に聞こえる。

「つ……! またあとで来ますわ! 逃げないことね! よくって!」

よくない。でもそう言ったら怒るだろうから、とりあえずうなずいておく。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく千冬姉が教壇に立っている。よっぽど大事なことなのか、山田先生までノートを手持っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけない」

ふと、思い出したように千冬姉が言う。うん? クラス対抗戦? 代表者?

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。俺は例によって事前知識がゼロなので、まったく意味が

わからない。まあ、クラス長を決めるって言ってたから、とりあえずそうだと思っておけばいいか。たぶん面倒な仕事が多いんだろうな。なるやつはご苦労様だ。

「はいっ。織斑くんを推薦します!」

——ん? 織斑ってこのクラスにもうひとりいるのか? それは奇遇だ。

「私もそれが良いと思います」

おう。俺も、俺以外がなるのなら誰でもいいぜ。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか? 自薦他薦は問わないぞ」

ほうほう、織斑一夏ってこのクラスにもうひとり——ってそんなわけあるか!

「お、俺!」

つい立ち上がってしまう。そして視線の一斉射撃。振り向かなくてもわかる、これは「彼ならきつとなんとかしてくれる」という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差しだ。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか? いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっど待った! 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも——」

まだ反論を続けようとした俺を、突然甲高い声が遮った。

「待ってください! 納得がいきませんわ!」

パンツと机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリアなんとかさんだ。おお、人望がここで役に立ったぞ。人とは仲良くしておくものだな。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

「そうだそうだ、もっと言ってみてやれ!……ん?」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります! わたくしはこのような島国までI・S^{アイエス}技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ!」

あれ? 俺、人じゃなくなってる。なんで? ていうかイギリスも島国だろ。そんな言うほど日本と差なんかないだろ。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」
興奮冷めやらぬ——というか、ますますエンジンが暖まってきたセシリアは怒濤の剣幕で言葉を荒げる。代表にはなりたくないが、こうまで言われるとちよつと癪だ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」

カチン。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

——あ。

「なっ……!?!」

つい、言ってしまった。こう、つるつと口が滑ってしまった。

おそろおそろ後ろを向くと、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。うわあ……やってしまった……。

「あっ、あっ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

あー、もう、こうなったら仕方ない。覆水盆に返らず。転がりだした石は止まらない。

「決闘ですわ!」

パンツと机を叩くセシリア。ついでに手袋も投げてきたりするんだろうか。手袋してないけど。っていうかあの決闘申し込みってイタリアだっけ?

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ!」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない!」

「そう? 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね!」

流れとはいえ勝負をすることになってしまった。しかし、男が本気で女子と力比べをするわけにもいかないし、どうしたものかね。

「ハンデはどのくらいいつける?」
「あら、早速お願いかしら?」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

と、そこまで言ってクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ?」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

みんな本気で笑っている。——しまった、そうだった。

今、男は圧倒的に弱い。腕力は何の役にも立たない。確かにISは限られた一部の人間しか扱えないが、女子は潜在的に全員がそれらを扱えるのだ。それに対して、男は原則ISを動かせない。もし男女差別で戦争が起きようものなら、男陣営は三日と持たないだろう。それどころか、三時間で制圧されかねない。ISは過去の戦闘機・戦車・戦艦などを遥かに凌ぐ超兵器なのだから。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

さっきまでの激昂^{げききやう}はどこへやら、セシリアは明らかに嘲笑^{ちやうしやう}をその顔に浮かべていた。

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ? セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら?」

ちようど斜め後ろの女子が気さくに話しかけてきた。けれど、その表情は苦笑と失笑の混じったもので、俺はついカチンと来てしまった。

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー? それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの?」

「……………」

確かに俺はIS同士の戦闘を生で見たことはない。せいぜい、千冬^{ちふゆ}姉の現役時代の動画をこっそり見たことがある程度だ(千冬姉は俺にIS絡みのことをとにかく見せたがらなかった)。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って千冬姉が話を締める。俺は何とも言えないモヤモヤした感情を抱きながら、席に着いた。

(一週間あれば基礎くらいはマスターできるだろうし、そんなに難しいもんでもないだろう。入試の時一発で動いたし、まあなんとかなるか)

しかしまあ、なんとかなってしまおうと、クラス代表になってしまおう。それはそれで頭の痛い話だったが、何にしても覆水盆に返らず。一度吐いたツバは飲めないのだ。

(よし、真面目に授業を聞こう)
俺はさっそく机の上の教科書を開いた。



「うう………」

放課後、俺は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややくいんだ……?」

とにかく専門用語の羅列なのだ。辞書でもなければやっつけていけない。だが I S の辞書などは存在しないので、つまり俺は今日一日ほとんどまったくなにもやっつけていなかった。

ちなみに放課後とはいえまったく状況は変わっていない。また女子が他学年・他クラスから押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

(うぐ……。勘弁してくれ……)

昼休みも、それはもう地獄だった。俺が学食に移動するとゾロゾロと全員ついてくるのだ。大名行列じゃないっての。しかも学食ではまたモーゼの海割りで、俺はちよつとしたガリバー状態だった。はじめて日本にきた珍動物かよ。そういえば昔ウーパールーパーって流行ったらしいが、こういう生き物なのか名前からはまったく想像がつかん。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい?」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。どうでもいけどこの先生、やっぱり身長低い印象を受けるな。実際は平均くらいっぽいけど。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

そう、ここ I S 学園は全寮制なのだ。生徒はすべて寮で生活を送ることが義務づけられている。これは将来有望な I S 操縦者たちを保護するという目的もあるらしい。確かに、未来の国防が関わっているとすると、学生の頃からあれこれ勧誘しようとする国がいてもおかしくない。——というか、実際どこの国も優秀な操縦者の勧誘に必死だ。

「俺の部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか? 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑くん、そのあたりのことって政府から聞いてます?」

最後は俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

ちなみに、政府って言うのはもちろん日本政府。何せ、今まで前例のない『男の I S 操縦者』だから、国としても保護と監視の両方を付けたようだった。

ちなみにあのニュースが流れてから自宅にはマスコミだの各国大使だの果ては遣伝子工学研究所の人間までやってきた。『是非とも生体を調べさせて欲しい』って。誰が頷くか、

馬鹿^{ばか}。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいですよ。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「……あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが……」
 というか、いつまで耳打ちしてるんだこの人。クラス内外の人間がますます興味津々の顔をしてるじゃないか。

「あっ、いやっ、これはそのっ、別にわざととかではなくてですねっ……!」

「いや、わかってますけど……。それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか?」

「あ、いえ、荷物なら——」

「私を手配をしておいてやった。ありがたく思え」

ああ、この声、絶対千冬姉だよ。すでに俺には無条件でダンスベイダーの曲が流れていた。ちなみにもう一曲流れることがあるが、そっちはターミネーターの曲だ。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

すげえ大雑把^{おおざっぱ}。確かにその通りだけど、人間には日々の潤いも大事だと思っただけで、姉さん。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂

で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか?」

俺、大浴場って好きなのに。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂^{ふろ}に入りたいのか?」

「あ……」

そうだった。ここ、俺以外は女子しかいないんだった。

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか!? だっ、ダメですよ!」
 「い、いや、入りたくないです」

どんな目に遭うかわかったものではない。というか、普通にダメだろ。倫理的に。
 「ええっ? 女の子に興味がないんですか!? そ、それはそれで問題のような……」
 どうしよう、この人結構人の話を聞いてない。

きゃあきゃあど騒ぐ山田先生の言葉が伝言ゲーム的に伝播したのか、早くも廊下では俗に言う『婦女子談義』とやらが花咲いていた。

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……?」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って! すぐにね! 明後日までには裏付けとって!」

なんの話だ、なんの。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

校舎から寮まで五十メートルくらいしかないのに、どうやって道草をくえというんだこの人は。

そりゃ確かに各種部活動、ISアリーナ、IS整備室、IS開発室などいろんな施設・設備があるIS学園だが、今のところはそれらに関係はない。いざれ見て回らなければいけないだろうが、今日のところはとにかく休みたかった。というより、女子の視線から解放されたかった。

「ふー……」

千冬姉と山田先生が教室から出て行くのを見送って、俺はため息混じりに立ち上がった。また教室内外であれこれ騒がしい声が聞こえるが、もう今日のところは無視を決め込んで部屋に行こう。ここよりはたぶんマシだ。

「えーと、ここか。1025室だな」

俺は部屋番号を確認して、ドアに鍵を差し込む。あれ？ 開いてるじゃん。ガチャ。

部屋に入ると、まず目に入ったのは大きめのベッド。それが二つ並んでいる。そこいらのビジネスホテルより遥かにいい代物なのは間違いない。こう、見てるだけでふわふわ

感が醸し出されている。これが格の違いというやつだろうか。国立万歳。

荷物をとりあえず床にやって、俺は早速ベッドに飛び込む。……おおお、なんというモフ感。これは間違いなく高いベッド&羽毛布団。

「誰かいるのか？」

突然、奥の方から声が聞こえた。ドア越しなんだろう、声に独特の曇りがある。そういえば全室にシャワーがあるって言ってたっけ。——ん？

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

——何か、すごく、いやな予感が、こう、足下から、ぞわぞわと。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之——」

「——箒」

シャワー室から出てきたのは、今日再会を果たした幼なじみだった。

今し方までシャワーを使っていた。そしてシャワー室から出てきた。どうやら脱衣場は洗面所と兼ねているタイプだ。そして相手が女子だと思ってそのままの格好で出てきたのか、箒はその体にバスタオル一枚を巻いただけの姿だった。あ、ポニーテールじゃない。

白いバスタオルの面積は色んな意味でギリギリで、その端から下は瑞々しい太ももが露出している。シャワーを浴びていたのを証明するように、つうっ……と水玉が脚線を滑り落ちる。健康的な白さを持った肌が眩しい。

その上のくびれた腰はよく鍛えられた体であることをタオルの上からでも感じさせた。

引き締まっっていて、それでいて女性的なラインを主張している。タオルを押さえている手の下では、かなり大きな胸の膨らみが見て取れた。何せ体を最後に見たのは小四の頃の水泳授業だ。あの頃の面影なんか微塵もない。意外と箒^{かき}って着やせするタイプなんだな。——以上、○・三秒の思考世界終了。

「……………」

きょとんとした顔の箒。俺もきょとんとしているだろう。全日本きょとん選手権予選、開幕だ。

「い、い、いちか……?」

「お、おう……」

俺が頷くと、ポツと顔を真っ赤にする箒。そりゃあ、まあ、シャワーから上がったすぐ
に異性がいたらそうなるだろう。俺でも反応&対応に困ること必至だ。

「っ……!? み、見るな!」

「わ、悪い!」

慌てて顔を横に逸らす。ちらっと見えた横目の視界では、箒が体を隠すように（あるいは守るように）タオルできつく自分を抱きしめている姿だった。……押し上げられて逆に見えてしまった胸の谷間が、俺の心臓をひときわ強く脈打たせる。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる……?」

ギギギ……という音が聞こえてきそうなほど、ぎこちない動きで俺に聞いてくる箒。

「いや、俺もこの部屋なんだけど——」

そこからの展開は早かった。超速だ。さすがは全国剣道大会優勝者。箒は即座に壁に立てかけてあった木刀を取ると、くるり一回転して上段打突の構え。そこから基本に忠実な低腰短歩で一氣に間合いを詰めてくる。——って死ぬ!

「うおっ!」

俺はベッドから飛び降りると一目散にドアを指した。

バタン!

ドアの向こう側へと間一髪の脱出。背中で閉めた反応が遅れてじーんとやってくる。

「助かっ——」

ズドン!

顔の真横、わずかに頬^ほの二ミリ隣から木刀の切っ先が突き出していた。おい、このドア木製だぞ。それを木刀で貫通するって言うのはどういう技術があれば可能なんだ。

ズズズ……と木刀の切っ先がドアの中に沈んでいく。ほっ、諦めてくれたか。

ズドン!

「って、本気で殺す気か! 今のかわさなかつたら死んでるぞ!」

数秒前まで俺の頭があつた場所にまた鋭い打突が飛んできた。

「……なにになに?」

「あっ、織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！ いい情報ゲットー！」
騒ぎを聞きつけて、それぞれの部屋から女子がぞろぞろと出てくる。

しかも、困ったことに全員がラフなルームウェアで、かなり男の目を気にしない格好をしている。一部の子に至っては、長めのパーカーを着て、下にはズボンもスカートも穿いていない。白の逆三角形がちらちらとのぞいていた。

他にも、羽織っただけのブラウスの合間から肌色の胸元が見えている子までいる。……女子って、そんなに簡単に下着を取っちゃうのか？ 大丈夫なのか、色々。

「……箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。どうか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

頭の上で合掌。届けこの思い。

「……………」

ドアから返ってきたのは沈黙だった。ただ、木刀の切っ先は室内に引っ込んでいった。三回目の打突が来ないことを切に願う。

しーん……。

それからしばらく続いた沈黙。時間にして二、三分程度だとは思うが、今の俺にはそれが一時間以上に感じられた。

ガチャ。

「……入れ」

「お、おう」

ドアを開けた箒は、剣道着を身にまとっていた。すぐに着られる服がこれだったのだろう。実際、大急ぎで着たのか、帯の締め方が緩い。

何にしても入室許可を得た俺は、俺の部屋に入った。……あれ、なんかおかしいぞ？

「何だ？」

ギロリ。睨まれた。すみません、何もおかしくありません。

どすっとベッドに腰掛ける箒。あ、こら、奥側は俺が狙っていたんだぞ。

「……………」

むすっとした顔で、まだ濡れたままの髪を手早くポニーテールにまとめる箒。うん、いつもの箒っぽくなった。少なくとも見た目は。

「お前が、私の同居人だというのか？」

「お、おう。そうらしいぞ」

また睨まれた。こいつ、視線で竹くらい切れそうだな。こう、スパーンって。

「ど、どういふつもりだ」

「へ？」

「どういふつもりだと聞いているっ！ 男女七歳にして同衾せず！ 常識だ！」

いつの時代の常識だよ、それは。いやでもしかし、十五の男女が同棲——じゃない、同居するのは確かに俺も問題があるとは思うぞ。

「お、お、お……」

「お？」

「お前から、希望したのか……？ 私の部屋にしろと……」

「そんな馬鹿な」

なぜ俺がわざわざ命の危険がある選択肢を選ぶんだ。それはないだろ。

——だがしかし、俺の回答はおおよそ失敗だったらしい。そうでなきゃ木刀が飛んでくるはずがない。

「あ、あぶねえっ！」

ギリギリ。本当にギリギリのところまで木刀をキャッチして止めた。いわば真剣白刃取り状態。しかし木刀なので手のひらがすごい痛い。衝撃は殺せないのだ。

「馬鹿……馬鹿だと？ そうかそうか……」

ああ、顔が怖い。すげえ怖い。幼なじみって実はどこかの秘密結社の刺客に付けられるコードネームか何かだったりするのだろうか。

箒は俺に木刀を止められたまま、それでも押し切ってしまおうと体重をかけてくる。やばい、これはやばい。真剣じゃないから切れたりはしないが、このまま頭に当てられたりしたら気絶くらいはする。最悪頭蓋骨陥没だろうか。いやそこまではいいかないか。

「……………」

いや、前言撤回。目の前にいる鬼神を見たら、真剣じゃなくてもまっぶたつにされそう

だ。そしてさらに体重をかけてくるんだが、つまり体勢は俺を押し倒しているような格好で——

「わあ……篠ノ之さん、大たーん」

「抜け駆けしちやダメだよー」

「織斑くん総受けて言うのも良いわね……」

だから最後のはなんだ。そして、鍵をかけていなかったドアから顔を出しているだけで五名、おそらく廊下にはその倍以上の女子が室内の様子をうかがっているのだろう。

「なっ、ななっ……!?!?」

ぱっと俺から飛び退く箒。よかった、命が助かった。

「あれー？ 終わっちゃったー」

「いい感じだったのにねー」

ほう。最近の女子高生は殺人未遂現場を『いい感じ』というらしい。覚えておこう。あとで五反田にメールで教えてやらなくては。

「……………!」

無言で女子を追い出し、ドアを念入りに施錠する箒。どうやら本格的な殺人現場に入るらしい。環境作りは最優先でしないとイケないからな。だがアライはどうするんだ？ いや待て、俺が思いつかないだけで、こいつはすでに幾重にも張った予防線で守られているのかも知れない。なんとということか。こうして人は殺されていくのか。なんと恐ろしい

世界だ。

「……」夏

「はい、なんですか？」

死を前にした俺にすべてのしがらみはなかった。ああ、人間はここまで自由になれるのか。

「なんて顔をしているんだ、お前は……」

「？」

生まれつきの顔をしてるんじゃないのか？

「まあいい。それで、今の状況についてだが——」

ああ、俺をどう始末するかだな。いいか箒、殺人で難関なのは殺す時じゃない。殺した後だ。五十キログラムを軽く超えるタンパク質と脂質の固まり。しかも五リットルを超す血液を内包している。そして一番見落としがちなのが骨だ。骨は実はかなりの早さで腐る。一般的にはそういうイメージがないだろう？ だから余計に戸惑う。骨は解体の段階でかなりの数が出るから、それをいちいち処理していたら時間がかかって仕方がない。ここで登場するのが冷蔵庫だ。冷蔵庫で——

「聞いているのか、一夏っ」

「お、おう!? なんだ!? 聞いてないぞ!」

「聞いてないことを正直に言う者がいるか、馬鹿……」

はあっと呆れたようにため息をつかれる。う、なんか俺が悪いことをしたみたいじゃないか。すごい罪悪感。ついでに居心地の悪さ。だがしかし逃げ出すのは男じゃないだろう。「す、すまん。もう一回話してくれ……」

悪いと思つたら頭を下げよう。世界の常識だ。

—— 思つてなくても、状況的に相手が怒っていたら自分が頭を下げよう。それで世界は大体うまいく。

「だ、だからな。この部屋の決まりというか……その、なんだ。く、暮らす上で線引きは必要だろうという話でな……」

「ごによごによと潰れて、後半はかなり聞き取りづらかった。というか箒、なんでそんなにバツが悪そうな顔をしているんだ？ 心なしか頬も赤く見えるし……風邪か？」

「ま、まずシャワー室の使用時間だ。私は七時から八時。一夏は八時から九時だ」

「え、俺早いほうがいいんだけど……」

「わ、私に部活後そのままというのか!？」

「部活って、剣道部か？」

「そ、そうだ」

「あれ？ 部活棟にシャワー設備ってあったような……」

「わ、私は自分の部屋でないと落ち着かないのだ!」

む、そう言われれば仕方ない。俺だって、学校のトイレより家のトイレがいいに決まっ

ている。

「あれ？　そういえばここって個室にトイレないんだよな？」

「ああ、各階の両端に二カ所あるだけだな」

「それって男子用トイレってあるのか？」

ふとした疑問。だってそうだろう、IS学園アイエスは設立時から女子しか入学してないんだから、男子用トイレなんか必要なわけがない。

「……………」

「え、あれ、俺どうすんの？」

「しっ、知らん！　先生方に聞けばいいだろう！」

それもそうか。けれど最悪――

「最悪の場合は女子トイレを使うしかないのか…………？」

殺気がして、俺は飛び退いた。見ると、箒ほうきが先刻の木刀を再び手にしていた。ずいっとそれを俺の喉元のどもとに突きつけ、鬼神ここにありと言わんばかりの気配を発している。

「お、お前は、しばらく会わないうちに変態趣味に走るとは…………見損なったぞ！」

「うえ!!　なんでそうなるんだよ、箒！」

「当たり前だろう！　女子のトイレに入りたくないなど、変態以外のなんだという!?!　ええいつ、ここで成敗してくれる！」

「されてたまるか！」

とりあえず部屋の脇わきにあった荷物に竹刀を見つける。箒の私物だろうか、ポストンバッグに刺さっている。

(ちゃんと竹刀入れを使えよ…………お前、そういうのにうるさかったじゃん)

木刀と打ち合えば折れるだろうが、とりあえず箒が落ち着くまで持てばいい。そう思っ
てその竹刀を引き抜いた。

(ん？　なんか、引っかかってスムーズに行かないな)
ずばばっ。

「ああああっ!?!」

ようやく抜けた竹刀を、俺は中段に構えて箒と向き合う。

「?」

しかし竹刀の向こう側に見る箒は、ぱくぱくと金魚のように口を開閉させるだけで動かない。というか無茶苦茶あまくち狼狽ろうたいしていた。

「ん？　これ、なんだ…………？」

ふと、竹刀に絡まっている見慣れないものをつまんでみる。三角形を二つ並べてつな繋げたようなカタチのこれは――

「かつ、かつ、返せっ!!」

超速の強奪だった。木刀はベッドに放り捨ててある。

さらにいくつか竹刀に絡まっていたものも取って、箒はそれを両手で覆い隠した。

「……………」
あれ？　なんでこんなに顔を真っ赤にして俺を睨んでいるんだ？　風邪か？

—あ。

ふと、頭の中であることが繋がる。さっき触った物の正体がわかった。わかってしまった。
「箒」

「な、なんだ……？」

両手の中の物を守りに入っているからか、箒はさっきまでの攻勢は失って、今は警戒心むき出しで俺と距離を取ろうとしている。

ちらつと指の隙間すまみを見ると、白に薄ピンク、薄い青の布地が見えて、ああやっぱりと確信する。

「ブラジャー、付けるようになったんだな」

「ツ~~~~~~~~!!!!!!」

ドゴスッ！　爆音が俺の頭に響いた。

第二話「クラス代表決定戦！」

「なあ……」

「……………」

「なああって、いつまで怒ってるんだよ」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

にべもない。

ちなみに今は入学式翌日の朝八時。一年生寮の食堂だ。相変わらず右を見ても左を見ても女子。職員まで全員女性なんだから恐れ入る（当然といえば当然だが）。

そして俺は『同じ部屋のよしみ』とやらで、こうして箒と同じテーブルで朝食を取っているのだが、昨晚からこっちまともに会話が成立しない。

ちなみに俺のメニューは和食セット。ご飯に納豆、鮭さけの切り身と味噌汁みそしる。ついでに浅漬け。結構うまい。あれだろうか、血税で作られているからだろうか。国立万歳。

ちなみに箒も同じメニューだ。日本人ならやっぱり朝食は白米に限る。いやパン食も好きだが。しかしこの鮭妙にうまいな。塩味がほどよくて箸が進む。ご飯もふんわりほかほ

かだ。すばらしい。電気ジャーでこの食感はないだろうから、まさかかまど飯だろうか。「箒、これうまいな」

「……………」

無視された。が、賛同するように箒も鮭をつまんでいる。

——まあ、なんだ。俺は物心ついたころから千冬姉とずっと二人暮らしだから、格別『女の子と同居！ドキドキワクワク！』というような心境はない。大体何年千冬姉の洗濯物を扱ってきたと思っっているんだ。今更女子の下着一つで騒げるほどウブじゃない。

しかし、それはあくまで俺の事情。目の前の幼なじみにはなんの関係もないことだ。つまり、俺が箒の下着についてさらっとした態度なのが気に入らない……………のか？ うん？ あれ？ なんて箒は怒ってるんだ？

「だから、怒っていないと言っている」

と、目の前の人は言っていますが。ろくに顔を向けもしない、何かの偶然で目があっても急いでそらす。うん、これが怒っていないというなら、俺は全世界が平和であることを信じられるぜ。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってIS操縦者かあ。やっぱり彼も強いのかな？」

そしてこれも昨日から変わらない。周りでは女子が一定の距離を保ちつつも『興味津々

ですよ。でもがつつきませんよ』というむず痒い気配の包囲網。これもし沖合漁業だったらさぞかし大漁だろう。…………よし、何の意味もない例えだった。

「だから箒——」

「な、名前で呼ぶなっ」

「…………篠ノ之さん」

「……………」

名前で呼ぶなというから名字で呼んだら、今度は今度でむすつとしてしまった。箒、名字嫌い直ってないな。まあ、この名字は確かにちよっと訳ありなんだが——

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三名、俺の反応を待ちわびるが如く立っていた。

「ああ、別にいいけど」

俺がそう言うのと三人のうち声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は小さくガッツポーズをしている。周囲からは何か妙なざわめきが聞こえた。

「ああ、私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ」

「なんですかっ!？」

……ああ、うん、そうだよ。一年生が八名、二年が十五名、三年が二十一名自己紹介に来たよ。名前を覚えるだけで一苦労だった。ちなみに今『私のこと覚えてる?』と言われるたらの中率は二割を切るだろう。無茶言うな。

で、また朝一番から三名覚えなきゃいけないようだった。

ちなみに三人組はすでにどう座るか手打ち済みなのか、非常にスムーズに席に着いた。六人掛けのテーブル。その窓側に俺と箒。空いている席が三つ埋まる。残り一つ。俺としては埋まらないで欲しい。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

ちなみに本当だ。長年色々試行錯誤したが、体型と健康維持にもっとも無駄がない。元々は千冬姉がしてるのを真似したただけなんだけど。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか?」

三人組は、それぞれトレーの上のメニューこそ違うが、飲み物一杯にパン一枚、おかすが一皿(しかも少なめ)だった。

「わ、私たちは、ねえ?」

「う、うん。平気かな?」

なんとという燃費の良さだ。ISが女しか使えない理由って実はこれなのか?

「お菓子よく食べるしー」

……間食は太るんだぞ。というか、体に悪くないかそれ? いいのか? 輝ける十代なんてあつという間だぞ。人間の体は二十才から老化が始まるらしいぞ。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん? ああ。また後でな」

さっさと食事を済ませた箒は席を立てて行ってしまふ。バイキングとあってか、ここぞとばかりに和食しか選んでいなかった。相変わらずのサムライぶり。古き良き日本の伝統やまとをらし大和撫子というやつだな。いやよく知らないが。

(しかしルームメイトが箒とは。いやまあ、まったく面識のない女子と暮らすよりはいいか)

俺と箒は幼なじみだ。小学校一年の時に千冬姉の付き合いで剣道場に通うことになってから、四年生まで同じクラスだった。

とある事情で両親のいない俺と千冬姉は、よく篠ノ之夫妻に夕食に招いてもらっていた。正直、貧乏だったので大いに助かった記憶がある。

しかし何も最初から仲が良かったわけではない。むしろ、悪かった。けれどそこは同じ道を歩むもの——剣道をするもの同士ということで次第にうち解けていった(気がする)。

(あんまりよく覚えてないんだよなあ。昔のこと……)

まあ、俺に限らずみんなそうだろう。昔は昔、今は今。

「織斑くんって、篠ノ之さんと仲がいいの?」

「お、同じ部屋だって聞いたけど……」

「ああ、まあ、幼なじみだし」

俺としては別段意識することでもないのだが、周囲は大いにどよめいた。誰かの「え!?!」という声が聞こえたほどだ。

「え、それじゃあ——」

と。隣の女子……ええと、谷本たにもとさんが質問をしようとしたりとところで、突然手を叩く音が食堂に響いた。

「いつまで食べている! 食事は迅速に効率よく取れ! 遅刻したらグラウンド十周させるぞ!」

千冬姉の声がよく通る。途端、食堂にいた全員が慌てて朝食の続きに戻った。なにせこのIS学園のグラウンド、一周が五キロある——って、冗談じゃない。俺も急いで食べなくては。

ちなみに千冬姉は一年生寮の寮長も務めているらしい。相変わらず、いつ休んでいるのかわからない。弟としては心配なんだが、たぶん大丈夫なんだろう。実際、千冬姉にタフネスで勝てた試しがない。

(まあ、今はあんまり考えずにISの勉強に集中するか)

実際、来週にあのセシリアとの対戦がある。それまでになんとかISの操縦を物にしな

なくてはならない。

(なんとかなるだろ)

——結論。なんともなりそうにない。

二時間が終わった時点で、俺は早くもグロッキーだった。

(まずい……)

ダメだ。単語は予習のおかげである程度はわかるが、根本的に理解不能な箇所がある。何度やっても解けない数学の問題みたいだ。そう、式を知らないと解けないタイプの。

「……………」

しかし、こうなってくるとなおさら不思議だ。初めてISに触れたときのあの懐かしい感じ。まるで何年も前から知っていたかのような、そんな感覚。

けれど、こうして教科書を読むと、本当に俺がISを動かしたのかと疑いたくなるくらいに理解できない。

(うーん…………)

俺が腕を組んで教科書とにらみ合いを続けている途中でも、当然授業は進んでいく。山田先生は時々詰まりながらも、生徒たちにISの基本知識を教えていた。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常

に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ——」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

クラスメイトの一人がやや不安げな面持ちで尋ねる。確かに、あのISを動かしたときの独特の一体感は、人によっては不安を感じさせるのかもしれない。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、形崩れしてしまいますが——」

……ふと、俺と目が合う。そこで一回きよんとした山田先生は、数秒置いてからボツと赤くなった。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君はしていませんよね。わ、わからないですね、この例え。あは、あはは……」

その山田先生のごまかし笑いはなんとなく教室中に微妙な雰囲気を漂わせた。俺よりむしろ女子が意識しているみたいで、腕組みをするフリで胸を隠そうとしていた。

昨日の箒はらきとの会話がそうであったように、俺は今更女子の下着どうこうで騒いだりはしない。けれど、こうまでむず痒い気配——見て欲しいけど見て欲しくない——に囲まれて

いると、どうにも落ち着かない。

ヘンに気まずい雰囲気は、なんだか十分にも二十分にも感じられた。

「んんっ！　山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

浮ついた空気を咳せき払いでシャットアウト。千冬姉に促されて、山田先生は教科書を落としそうになりながら話の続きに戻った。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話——つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています」

なるほど。練習は裏切らないというやつだな。

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

すかさず、女子が拳手をする。

「先生！、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

「そっ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」

経験というのはもちろん男女交際のことだろう。赤面してうつむく山田先生を尻目しりめに、クラスクラスの女子はきやいきやいと男女についての雑談をはじめている。

なんとというか、すごく『女子校』的な感じだ。空気だけで糖度一〇はあるんじゃないか？

実際、この教室——だけじゃなく、学園全体の空気が甘いんだ。雰囲気じゃなく、実際に甘さを感じる。女の子特有の匂いってやつが、とにかくどこにでも充満している。正直、昨日からずっとそうだから、お腹いっぱいなんかとうに通り越して胸焼けしそうだ。

「……………」

「な、なんですか？ 山田先生」

「あつ、い、いえつ。何でもありませんよ」

訊かれて、両手を振ってお茶を濁す山田先生。なにかじろじろ見られていた気がするが……って、そりゃ昨日からずっとそうか。

キーンコーンコーンコーン。

「あつ。えっと、次の時間では空中における I S 基本制動をやりますからね」

ここ I S 学園では実技と特別科目以外は基本担任が全部の授業を持つらしい。休み時間十五分のためにいちいち職員室まで戻らないといけない先生たちは、なんとというかご苦労様だった。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはい、質問してもーん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

昨日の様子見は終わりを告げたのか、山田先生と千冬姉が教室を出るなり女子の半数がスタートダッシュ、俺の席に詰めかける。今『もう出遅れるわけにはいかないわ！』とか

聞こえたのは、錯覚じゃないんだろうな……。

「いや、一度に訊かれても——」

困るんだが。と続けようとして、なにやら整理券を配っている女子を見つける。しかも有料。商売をするな、商売を。

「……………」

俺を囲む集団を少し離れた位置で見ているのは、幼なじみこと箒だ。相変わらず怒っているように見えるが、そろそろ指摘するのはやめよう。人は学習する生き物だ。

(しかし参った。箒に I S のことを教えてもらおうと思っただが……こりゃ夜に訊くかないな)

そう思っている間も女子の早く質問に答えて視線が非常にづらい。どれから答えたらいいのやら。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!？」

「え。案外だらしな——」

パァンッ!

「休み時間は終わりだ。散れ」

おお、いつの間に背後に。しかもこのタイミングの叩きはあれか。個人情報ばらそうとしたからだろうか。それにしても千冬姉、ずっとそんなことしてると叩きキャラとして印象つくぞ。いいのかそれで、いいのか。

「ところで織斑おのむら、お前のISだが準備まで時間がかかる」
「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「????」

俺がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。

「せ、専用機!? 一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

どういふことだろうか。何がそんなにうらやましいのか。

まったく意味がわからないという顔をしていると、見るに堪えかねたという感じで千冬姉がため息混じりにつぶやく。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士しのののが作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士いま以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七

項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

えーと、整理しよう。

1. ISは世界に467機しか存在しない。

2. コアは篠ノ之博士以外作れない。博士はコアをもう作っていない。

3. 俺が特別待遇。ただし実験体。

ということか。うん、よくわかった。ちなみに篠ノ之博士というのは――

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……?」
女子の一人がおずおずと千冬姉に質問する。……まあ、篠ノ之なんて名字、そうそうないしいつかはバレるよな。

――篠ノ之しのののの束たばね。ISをたったひとりで作成、完成させた稀代の天才。千冬姉の同級生で、そして筈の実姉だ。俺も何度も会ったことがあるが、なんというか、『天才』だ。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

おい、教師。個人情報バラしていいのか。大体、束さんは今超国家法に基づいて絶賛手配中の人物だぞ。別に犯罪者ではないが、IS技術のすべてを掌握している人間が行方不

明というのは各国政府、機関関係者とも心中穏やかではないらしい。

「まあ、本人はどうでもいいんだろうなあ……」

あの人を食ったような表情を思い出す。例えるなら『狡猾な羊』だ。ちなみに千冬姉は『真面目な狼』。うん、我ながらなんとというイメージジョイス。ぴったりじゃないか。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!? やっぱり天才なの!」

「篠ノ之さんも天才だったりする!? 今度ISの操縦教えてよっ」

授業中だというのに、箒の元にわらわらと女子が集まる。おお、これは端から見ているとなかなかおもしろい光景かもしれん。道理で誰も助けたくないわけだ。

（あれ？ そういえば箒ってIS使ったことあったか……?）

ふと、記憶内を探る。うーん、やっぱり見たこと無いな。そもそも東さんと箒って——

「あの人は関係ない！」

突然の大声。俺は思考を中断されて、ぱちくりと瞬きをした。

見ると、箒に群がっていた女子も軒並み同じような表情をしていて、何が起こったのかわからない様子だった。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、箒は窓の外に顔を向けてしまう。女子は盛り上がったところに冷水を浴び

せられた気分のように、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻った。

（箒って東さんのこと、嫌いだったっけ……?）

再度記憶を探るが、あのふたりが一緒にいた光景がどうしても出てこない。そういえば、東さんの話を振ると、いつもそこで会話が終わるんだっけ。

「さて、授業をはじめろぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も箒が気になる様子だったが、そこはやっぱりプロの教師。ちゃんと授業をはじめた。

（あとで箒に話を聞いてみるか……）

そう思いながら、俺は教科書を開いた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

はあ、そうですかセシリアさん。

休み時間、早速俺の席にやってきたセシリアは、腰に手を当てるそう言った。どうでもいいけど、お前好きだねそのポーズ。どうでもいいけど。

「まあ？ 一応勝負は見えていますけど？ さすがにフェアではありませんものね」

「？ なんで？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわ

たくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿ばかにしていますの？」

「いや、すごいなと思ったただけけど。どうすごいのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう!？」

ババン！ 両手で机を叩かれた。おい馬鹿、ノートが落ちたたる馬鹿。

「……こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でAISアイエスは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「そ、そうなのか……」

「そうですわ」

「人類って今六十億超えてたのか……」

「そこは重要ではないでしょう!？」

ババン！ こら馬鹿、教科書が落ちたじゃないか馬鹿。

「あなた！ 本当に馬鹿にしていますの!？」

「いやそんなことはない」

「だったらなぜ棒読みなのかしら……?」

はて。なぜだろう。

「なんでだろうな、箒ほうき」

ギンツッ！ という音付きで視線が飛んできた。はい、この間〇・八秒。『私に振るな!』と無言で告げている。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

箒は自分に矛先を向けてきたセシリアに、鋭い視線を返す。

「妹というだけだ」

こら箒、本気ですごむなよ。怖いから。ほら、セシリアとか「う……」って感じで怯ひるんでるぞ。どこのヤクザだお前は。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっと髪を手で払ってきれいに回れ右、そのまま立ち去っていった。うーん、ポーズがいちいち様になるやつだ。モデルでもやってたんだろうか。

「箒」

「……………」

「篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ」

フォローは大事。ていうかあれだ、さっきの一件で箒が妙に浮いているし、ここはクラスメイトとして見過ごせないだろう。

「他に誰だれか一緒に行かない?」

と、適当に振ってみる。

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待ってー」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

おお、入れ食いだな。やっぱりクラスメイト同士仲良くしたいものだ。なあ箒もそう思うだろう？

「……私は、いい」

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと——う、腕を組むなっ！」

ははは、箒は拒否するだろうと思っていたから、対策も万全だ。こいつは大体こうやって行動で強引に動かせば正解だ。

「なんだよ歩きたくないのか？ おんぶしてやろうか？」

「なっ……！」

ボツと顔を赤くする箒。うん、さすがにこうまで言われたらイヤでもついてくるだろう。

「は、離せっ！」

「学食についたらな」

「い、今離せ！ ええいっ——」

箒の腕に絡ませていた腕が、肘を中心^{ひじ}に曲げられる。「痛っ」と思った次の瞬間には視

界が反転、俺は床の上に投げ飛ばされていた。

「……………」

うわ、痛え。遅れて背中に激痛が走った。ちなみに周囲の女子はぼかんとしている。

「腕あげたなあ」

「ふ、ふん。お前が弱くなつたのではないか？ こんなものは剣術のおまけだ」

古武術を「おまけ」で習得している女子はきっと日本でお前だけだよ。

「え、えーと……」

「私たちやっぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

あー、せっかく集まってくれた女子が蜘蛛の子を散らすように退散していった。何してるんだ馬鹿、箒のために集めたのに。

「……………」

俺は床にさよならを告げると、ばんばんと服についたほこりを払う。箒は「私は悪くないぞ」と言いたげに、腕を組んでそっぽを向いていた。

「箒」

「な、名前で呼ぶなど——」

「飯食いに行くぞ」

がしっ。箒の手を強引に掴む。

「お、おいつ。いい加減に——」

「黙ってついてこい」

「む……」

俺がにべもなくそう言うと、箸はされるがままについてきた。最初からこういえばよかった。まったく。

はい、学食到着。すげえ混^こんでるが、二人座って昼食をとるくらいは出来そうだ。

「箸、何でもいいよな。何でも食うよなお前」

「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」

「ふーん。あ、日替わり二枚買ったからこれでいいよな。鯖^{さば}の塩焼き定食だつてよ」

「話を聞いているのか、お前は！」

「聞いてねえよ。俺がさっきまでどんだけ穏和に接してやっていると思ってたんだ馬鹿。台無しにしゃがって。お前、友達できなかったらどうすんだよ。高校生活暗いと思まんないだろ」

「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん、日替わり二つで。食券ここでいいんですよ？」

プラスチックの食券をカウンターに置く。さっきから右手しか使えないからすげえ不

便。左手？ 箸を掴んでるよ。逃げないように。こいつの逃亡率はおそらくサボテンダー並みだ。

「いいか？ 頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？ 箸だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは……」

「なんだもなにもあるか。おばさんたちには世話になったし、幼なじみで同門なんだ。これくらいのお節介はやらせろ」

「……………」

むすっとした顔で視線だけ天井に逃がす箸。こいつ、引っ越してからひねくれたなあ。いや、前からそうか。目を離すとすぐ集団から浮くんだよな、箸って。

「そ、その……ありが——」

「はい、日替わり二つお待ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそうだ」

「うまそうじゃないよ、うまいんだよ」

そう言って恰幅^{かっぷく}のいい学食のおばちゃんはにかつと笑った。うん、いいひとだ。

「箸、テーブルどっか空いてないか？」

「……………」

「箸？」

返事がないので見ると、さつきよりも益々不機嫌そうな顔をしていた。

「……向こうが空いている」
俺の手を払って、自分の分の日替わり定食を手にしたすと歩き出す。え、なんで？
なんでいきなり怒ってるの？

「とうりあえず箸を追って、ちょうど二人分空いていたテーブルにつく。」
「そーういやさあ」

「……なんだ」
味噌汁に口を付けながら返事。俺も焼き鯖の身をほぐしながら続ける。

「ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」
「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

それを言ったらおしまいじゃないか。……そうなんだけどさ。
「それをなんとか、頼むっ」

箸は持ったまま、ぱしりと手を合わせて箸を拝む。男が一回やると言った以上後には引けないし、やるからには勝たないと男が廃るというものだ。

「……………」
しーん。無視された。それどころか黙々とほうれん草のおひたしを食べている。なんてやつだ。

「なあ、箸——」

「ねえ。君って噂のコでしょ？」

いきなり、隣から女子に話しかけられる。見ると、三年生のようだった。リボンの色が違う。一年は青、二年は黄色、三年は赤だ。癖毛なのかやや外側に跳ねた髪が特徴的で、どこかリスを思わせる人なつつこい顔立ちをしている。おお、目の前の強面幼なじみとは対極に位置するな。

さすがに三年生だけあって容姿だけでなく雰囲気も大人びている。見ろ箸、こういう社交性が社会では必須なんだぞ。

「はあ、たぶん」
俺が返事をする、先輩は実に自然な動きで隣の席にかけた。組んだ腕をテーブルに乗せ、若干傾けた顔を俺に向けてくる。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい、そうですけど」

なんだなんだ？ 噂ってそんなことまで広まってるのか。さすが女子、噂と特売には目がなあって本当なんだな。

「でも君、素人だよな？ IS稼働時間いくつくらい？」
「いくつって……二〇分くらいだと思いますけど」

「それじゃ無理よ。ISって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？ だったら軽く三〇〇時間はやってるわよ」

うーん、具体的に何時間以上からすごいかわからんから、そう言われてもピンと来ない。しかしまあ、このままではセシリアに敗北するのは明らかかなようだ。

「でさ、私が教えてあげよっか？　ISについて」

言いながら、ずいっと身を寄せてくる先輩（名前は知らない）。

おお。なんて親切な人だ。どこかの幼なじみとはえらい違いだ。捨てる紙あれば収集車に出せとはこのことか。

「はい、ぜ」

是非に、と言おうとした言葉は、横やりに遮られた。

「結構です。私が教えることになっていきますので」

食事を続けながら、いきなり箒がそんなことを言い出す。あれ？　箒が教えてくれることになってたのか。

「あなたも一年でしょ？　私の方がうまく教えられると思うなあ」

「……私は、篠ノ之束しののむねの妹ですから」

言いたくなさそうに、それでもこれだけは譲れないとばかりに箒が言う。

「篠ノ之つて——ええ!？」

先輩はここぞとばかりに驚いた。そりゃあなあ、ISを作った人の妹が目の前にいればなあ。

「ですので、結構です」

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

さすが世界的な天才——の妹。その名前を出しただけでたいいの人間はたじろぐ。事実、親切な先輩は軽く引いた感じで行ってしまった。ああ、親切だったのに。

「なんだ？」

「なんだって……いや、教えてくれるのか？」

「そう言っている」

最初からそう言ってくればもう少しスムーズだったんだけどな。

ともあれ、これでISアイエスのことを教えてくれる人間は確保した。あとはやってみるだけだ。

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。一度、腕がなまってないか見てやる」

「いや、俺はISのことを——」

「見てやる」

「……わかったよ」

なんでこう、俺の周りの女って強情なのが多いんだろうか。そういう運命なのかもしれない。やれやれ。

「どういうことだ」
 「いや、どういうことって言われても……」
 時間は放課後、場所は剣道場。今もまたギャラリィは満載で、俺は箒ほうきに怒られていた。手合わせを開始してから十分。俺の一本負け。面具を外した箒めじりの目尻めじりはつり上がったいる。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

まあ、実際は家計を助けるためにバイトしてただけだ。

「――なおす」

「はい?」

「鍛え直す! I S以前の問題だ! これから毎日、放課後三時間、私が稽古けいこを付けてやる!」

「え。それはちょっと長いような――ていうかI Sのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言っている!」

うわあ。すげえ怒ってる。これはもう何言っても聞いてくれない気がするな。

「情けない。I Sを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔いしくはないのか、一夏いっか!」

「そりゃ、まあ……格好悪いとは思うけど」

「格好? 格好を気にすることが出来る立場か! それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか?」

カッチーン。来た。頭に来たね。いくら何でもそこまで言われる筋合いはないぞ。

「楽しいわけあるか! 珍動物扱いじゃねえか! その上、女子と同居おなじまでさせられてるんだぞ! 何が悲しくてこんな――」

「わ、私と暮らすのが不服だというのかっ!」

バシーン! 間一髪、振り下ろされた竹刀を竹刀で受け止める。うわ、待て馬鹿ばか。今防具外してるんだぞ、殺す気か!

「お、落ち着け箒。俺はまだ死にたくないし、お前もまだ殺人犯になりたい年頃としごろでもないだろ?」

ていうか、思いつきり両手で打ち込んできている箒を、俺は右片手で受け止めてるんだぞ。左手は現在面を好評抱きかかえ中。うわあ、手がぶるぶるしてきた。

「箒、な? 頼むから。今度なんかおごるから」

「……ふん、軟弱者め」

やっとこさ構えをとくと、箒は俺を軽蔑けいべつの眼差まなざししで一瞥いちめつして更衣室に行ってしまった。

俺は命が助かったことにとりあえず安堵あんど。昨日からずっとジェットコースター乗りっぱなしの気分だ。

(しかしまあ……)

強くなったなあ、箒。昔は俺の圧勝だったんだけど。

打たれた小手が今になって痛み出す。ああこれ、真っ赤になるな……。

「織斑あぢぢくんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと聞こえるギャラリーの落胆した声。ああ、くそう。やっぱり男が女に負けるなんて惨めこの上ない。

それに何より、自分が許せない。

こんな有様じゃ、何かに勝つなんて——それどころか、誰かだれを守るなんてできるはずもない。

久々に味わう、底辺の気持ちだった。

「……………トレーニング、再開するか」

底辺なら、最底辺なら、あとはあがるだけしかない。これ以上は落ちようがない。

——よし。やろう。

俺は、こんなところで負けていられないのだから。



(すこしきつく言い過ぎただろうか……)

剣道場の更衣室で着替えをしながら、箒はさつきからずっと同じことを考えていた。

六年ぶりに再会した幼なじみ。その変わってない子供の部分と変わった大人の部分、その両方をかいま見て、いつしか胸は早鐘を打っていた。

(い、いや、あれくらいでいいのさ。大体、たるんでいる。明らかに一年近くは剣を握っていない。でなければあんな——)

あんな風に、私に負ける訳がない。

「……………」

一夏は、六年前の幼なじみは、強かった。

そして何より、格好良かった。

(ま、まあ、それは、その、なんだ。格好は……うむ、わ、悪くないと思うぞ)

六年前よりも、当然だが大人びている。ただの生意気なだけだった瞳ひとみは、わずかだが大人の男を感じさせるものに変わっていた。

(しかし、たるんでいる。あんなに簡単に負けるなど、恥ずかしくはないのか。まったく)

思い出すとまたムカムカと腹の虫が治まらない。

（大体なんだ、昔はあれだけ打ち込んでいた剣道を軽々しく廃れさせるなど、男のすることではない！）

俗に、剣の道は三日欠かせば七日を失うという。今の一夏がまさにそれだった。

技術的に後退しているのではなく、感覚的に喪失しているのだ。そして、それが何より取り戻すのに時間がかかる。感覚とは、経験の積み重ねの果てに生まれる合理である。得るに難く、失うに易い。

（それにしても——）

頭に巻いた手ぬぐいをほどこき、髪に触れる。長く伸びたそれは、後ろでくくってもまだ腰近くまで届くほどだ。

（よく私だとわかったものだ……）

六年。それも九歳からの六年である。顔は当然、体も全く別物に成長しているというのに、かつての幼なじみは名前を聞く前からわかつているようだった。

「ふふっ」

それが、妙に嬉しい。

箒が一夏だとわかったのは、単純に一夏の名前がニュースで流れたときに写真を見たからだだった。そうでなければ、わからないほどかつての幼なじみは男らしい顔立ちになっていた。——正直に言えば、『格好いい』とさえ思った。名前を見て、手にした湯飲みを落としかけたほどである。

一夏は、新聞で昨年の剣道全国大会優勝を知ったと言っていたが、おそらく写真もない端っぱの記事だろう。それなのに、一夏は『すぐにわかった』と言った。言ってくれた。

（髪型を変えなかった甲斐があったというものだ）

些細な偶然にすぎるような、あるいは願掛けに期待をするような、そんな甘い考えが多量なこともあった。箒も十五歳の春を迎えた少女である。恋に懸想するのはなんら不自然ではない。

「……………はっ!？」

ふと、姿見に映った自分の顔を見て我に返る。「ほうっ……」と恋のため息をつく、乙女そのものの顔に、軽く引く。

「……………」

特に意味はないが、鏡の中の自分をキリッと睨む。本当に特に意味はなかったが——あえて言うなら恥ずかしさをごまかすためだが——箒としては平静さを取り戻すきっかけになっただけだ。先刻までの吊り上がった目尻に戻る。

（と、とにかく、明日から放課後は特訓だ。せめて人並み程度に使えるようになってもらわなくては困る）

何が困るのか、どこくらいが『人並み程度』なのか、あまり自分でも整理がついていないようだったが、箒は腕組みをしてうんうんと頷いた。

（それに——）

それに、放課後に一夏と二人きりになる口実が出来た。
 「いや！ そ、そのようなことは考えてはいないぞ！」
 そう、そうだと。何も不埒なことはない。下心などあるはずもない。私は純粹に、同門の不出来を嘆いているだけだ。そして同門ゆえに面倒を見てやる。何もおかしなところはない！

「故に正当だ！」

だだっ広い更衣室で一人、握り拳を作って声を荒げる箒だった。



そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「――なあ、箒」

「なんだ、一夏」

同居生活から一週間、俺と箒は名前で呼び合う仲に戻っていた。六年の溝は案外浅かったのかもしれない。喜ばしいことだ。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

そう。一つ、問題が解決していない。

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

あれから六日、箒は剣道の稽古をみっちり付けてくれた。問題は、それしかしてくれなかったというところだ。

「し、仕方がないだろう。お前のISもなかったのだから」

「まあ、そうだけど――じゃない！ 知識とか基本的なこととか、あったらろ！」

「……………」

「目をそらすなっ」

つまりはこうだ。俺専用のISとやらは何かごたついていたらしく、結局来ていない。そう、今もまだ来ていない。

「……………」

「……………」

俺と箒、沈黙。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

三度も呼ばなくていいです。第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきたのはおなじみ副担任の山田先生だ。

本気で転びそうで、見ているこっちがハラハラする足取りなのも相変わらず。しかし、

今日はいつもとよりさらに輪をかけてあわてふためいている。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す~~~~は~~~~、す~~~~は~~~~」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

なんとなくノリでそう言ったら、山田先生は本気で息を止めた。こうしている間も酸欠でみるみる顔が赤くなっている。この人、冗談通じないなあ。

「……………」

「……ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

うん、止めるタイミングを見失っただけです。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「パアンツ！ いつもと同じ、弾けるような打撃音。痛みも炭酸飲料並みに軽いと嬉しいが、残念なことに威力だけはヘビー級だ。さすが元日本代表。」

「千冬姉……」

「パアンツ！」

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ぬ」

うわあ、聞きました？ 教育者とは思えないお言葉。美人の割に彼氏がいないのはこの性格のせいだと思う。

「ふん。馬鹿な弟にかけると手間暇がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐできるさ」

おお、読心術。千冬姉にはありとあらゆる意味で敵わない。

「そ、そ、それですわねっ！ 来ました！ 織斑くんの専用 I S！」

——え？

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ

本番でものにしろ」

——はい？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

——あの？

「え？ え？ なん……」

「早く！」

山田先生、千冬姉、箒ほうきの音が重なった。

俺の周りにはこういう異性しか以下同文。

ごこんっ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒さらしていく。

——そこに、『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったISが、その装甲を開放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用IS『白式』です！」

真っ白のそれ。無機質なそれは、けれど俺を待っているように見えた。そう、こうなることをずっと前から待っていた。この時を、ただこの時を。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

せかされて、俺は純白のISに触れる。

「あれ……？」

試験の時に、初めてISに触れた時に感じたあの電撃のような感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。——わかる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じがいい。後はシステムが最適化をする」

千冬姉の言葉通り、装甲を開いているIS——白式に体を任せる。受け止められるような感覚がしてから、すぐに俺の体に合わせて装甲が閉じた。

かしゅつ、かしゅつ、という空気を抜く音が響く。そして、生まれたときから我が身だったかのようなあの一体感。融和するように、適合するように、最初から俺のためだけにあったかのように、白式が『繋がる』。

解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているかのように理解できる。

「あ」

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り——。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じ態度に見える千冬姉の、その微妙な声の震えまで知覚できる。——ああ、心配してくれているんだな。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

ほっとしたような声。けれどそれは、ISのハイパーセンサーがなければおそらくわからないほどのブレだった。

（まあでも、俺のこと名前で呼んだし、やっぱりわかるかな？）

それとなく、箒の方に意識を向ける。目を向ける必要はない。なにせ、自分の周り360度全方位が『見えている』から。

「……………」

何か言いたそうな、けれど言葉迷っているような、そういう表情をしていた。これも、おそらく普段ならわからないレベルなんだろう。

「そういうのはチャンスとは言わないな」
 「そう？ 残念ですわ。それなら——」

——警告！ 敵 I S 射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キュインッ！ 耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を撃ちぬく。

「うおっ!？」

白式のオートガードがどうにか俺の体を守ってくれた。直撃は避けたものの、成形途中だった左肩の装甲が一撃で吹き飛ぶ。直後、遅れてやってきた衝撃波に左腕がねじ切られるように引っ張られて、神経情報としての痛みが稲妻のように走った。

瞬時に自動姿勢制御を行う白式に振り回されて、一瞬血の気が引く。ブラックアウト防御があるので気絶はしなかったが、かなり気持ちの悪い重力を感じた。

——バリアー貫通、ダメージ46。シールドエネルギー残量、521。実体ダメージ、レベル低。

（くそっ、俺が白式の反応に追いつけていない！）

大雑把に説明すると、ISバトルは相手のシールドエネルギーを0にすれば勝ちだ。ただし、今のようにバリアーを貫通されると実体がダメージを受ける。そっちは数値化されているシールドエネルギーと違って、破損箇所などは大なり小なり後の戦闘行為に影響を与える。

ちなみに、操縦者が死なないように、ISには『絶対防御』という能力が必ず備わっているらしい。あらゆる攻撃を受け止めるが、ただし、これはシールドエネルギーを極端に消耗する——と教科書に書いてあった。その通りなんだろう。今は肩だったから、『吹き飛ばされても平気』というISの判断で、『絶対防御』は使用されなかったようだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が降り注ぐ。しかも、それらすべてが的確にこちらを狙ってくるため、凌ぐのですら難しい。ガンガンとシールドエネルギーが削られ、白式からのアラートが絶え間なく響いていた。

「装備、装備は!？」

白式に問うと、すぐさま現在展開可能な装備の一覧が現れる。——一覧？

「一個しかないんだが……」

『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されない。はて、気のせいだろうか。はて。

「ええい、ままよっ！」
素手でやるよりはいい！ 俺は近接ブレード《名称未設定》を呼び出し、展開する。
キーン……。

高周波の音とともに、俺の右腕から光の粒子が放出される。それは手の中で形となって、収まった。

片刃のブレード、渡り一・六メートルはある長大な『刀』が俺の武器。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて……笑止ですわ！」

すぐさまセシリアの射撃。それを身をひねってかわすが、目の前にあるのは二十七メートルという絶望的な相手との距離。今の俺には、数キロにも思える道のりだ。だが――

「やってやるさ」

引くわけにはいかない。激戦が、はじまった。



「――二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりやどうも……」

シールドエネルギーの残量67。実体ダメージ中破。武器はかろうじて使えるが、かろうじて使えるというだけだ。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

そう言っていてセシリアは自分の周りに浮いている四つの自立機動兵器を、まるでフリスビーを取ってきた犬を褒めるかのように撫でる。

フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いている。その兵器は、ややこしいことに『ブルー・ティアーズ』というらしい。

……というより、その特殊装備『ブルー・ティアーズ』を積んだ実戦投入一号機だから、機体にも同じ名前がついているそうだ。二十七分の間セシリアが聞いてもいないのに喋ってくれた。講演ありがとうよ。

「では、閉幕と参りましょう」

セシリアは笑みとともに右腕を横にかざす。すぐさま、命令を受けたブルー・ティアーズ――ややこしいから以下ビット――が二機、多角的な直線機動で接近してくる。

「くっ……！」

俺の上下に回ったそれらビットの先端が発光、レーザーを放ってくる。それをかろうじて防御、あるいは回避をすると、その隙をセシリアのライフルが突いてくる。とにかくこのパターンだ。

「左足、いただきますわ」

――まずい！ 装甲を失っているそこに攻撃を食らえば、必ず『絶対防御』が発動する。

そうしたらシールドエネルギーは残量0。確実に俺の負けだ。なら。一か八か——

「ぜああああっ!!!」

ガギンッ！ 派手な音と一瞬の火花。無理矢理の加速で、俺の体はセシリアのライフル銃身に正面からぶつかった。その衝撃で砲口が逸れ、なんとかとのどめの一撃を免れる。

「なっ……!? 無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

セシリアは距離を取り、空いている方の左手を横に振る。すると、それまで周囲の空間に待機していたビットが俺に向かって飛んできた。

——よし、わかったぞ。

穿たれるレーザーをぐぐり抜け、一閃。重い金属を切り裂く感触が手のひらに伝わる。

真つ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、一秒後に爆散した。——一機撃墜。

「なんですって!？」

驚愕するセシリアに向けて、俺は上段打突の構えで斬り込む。

「くっ……!!」

後方に回避するセシリア、そしてまたその右手を振るう。そしてビット2と3が飛んでくる。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない! しかも——」

軌道を読み、ビット2の後部推進器を破壊して落とす。

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中させているからだ。そう
だろ?」

「……………!!」

ひくくっつとセシリアの右目尻が引きつった。凶星だな。残りビットは二機。しかも軌道は読めた。あれは必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる。

ISの全方位視界接続は完璧だ。けれど、それを使っているのは人間、真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に『見る』ことができない。送られてくる情報を頭の中で一回整理する分、そこにはコマ数秒の遅れが生じる。セシリアはそれを突いてきている。だから、逆に言えば、『どこに飛んでくるか自分で誘導できる』ということだ。簡単な理屈、自分から隙を見れば必ずそこに来る。そして俺はそれを待ち伏せするだけでいい。

(——やれる。あとは集中するだけだ)

右腕の刀を握り直す。箒どの放課後特訓が思わぬところで生きてきた。集中は、剣術の究極にして基礎。繰り返し積み重ねて得た感覚は、鈍っても失われはしない。

それに、気のせいだろうか。さっきからずっとISの動作が軽い。ダメージを受けている分その機動性は下降するはずだが、試合開始時よりもレスポンスが早い気がする。

(何にしても、距離を詰めればこちらが優位だ)

セシリアは自分でも言っていたように中距離射撃型だ。近接格闘の間合いで、あの長大なライフルが役に立つとは思えない。それに、見ている限りでは近接用の装備がない。

『待機状態』の可能性もあるが、それにしたって間合いを詰められてから展開したのでは間に合わないはずだ。

俺はやつと見え始めた勝利に、わずかに胸を躍らせた。



「はああ……。すごいですねえ、織斑くん」

ビットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がため息混じりにつぶやく。確かに一夏はISの起動が二回目とは思えないほどの健闘ぶりだった。

しかし、千冬は対照的に忌々しげな顔をする。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へえええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

なんとなくそう言った真耶に、けれど千冬はハツとする。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

「……………」

ぎりりりりっ。ヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたたっ!!」

「私はこちらからわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！ わかりました！ わかりましたから、離し——あううっ！」

ぎゃあぎゃあど騒ぐ真耶を気にもかけていない様子で、ずっとモニターを見つめているのは箒だった。心なしか、その表情は険しい。

「……………」

両手を合わせて無事を祈るような真似はしない。箒はそういう性格ではない。だからこそ、その表情には色々なものが含まれていた。

(一夏……)

箒がほんのわずかだけ唇を噛んだとき、試合は大きく動いた。



——獲った！

セシリアの間合いに入った俺は、振り下ろした刀でビット3を撃墜。そのままIS独自の無重力機動でビット4に回し蹴りをして吹き飛ばす。

ライフルの砲口は間に合わない。確実に一撃が入るタイミングだった。「——かかりましたわ」にやり、と。セシリアが笑うのが見えた。——まずい！ 本能的に危険を感じて距離を置こうとするが、それこそ間に合わなかった。

ヴンツ——。

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

回避が間に合わない。しかも、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。これは『弾道型』だ。

ドカアアンツ!!

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は包まれた。

◇

「一夏っ……!!」

モニターを見つめていた筈は、思わず声を上げた。

さっきまで騒いでいた千冬と真耶も、爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視する。

「——ふん」

黒煙が晴れたとき、千冬は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵あんどの色がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

まだかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。

そしてその中心には、あの純白の機体があった。

そう、真の姿で——。

◇

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

(な、なんだ……?)

意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウインドウ。その真ん中には「確認」と書かれたボタンがある。

訳もわからずそれを押すと、さらなる膨大なデータが流れ込んできた。

——いや、正確には整理されているんだ——。
 それが感覚的にわかる。そして、変化は劇的に訪れた。
 キィイィイィン……。

高周波な金属音。けれどそれはどこか優しいものに感じられた。

刹那、俺の全身を包んでいる——いや、今や我が身そのもののISが光の粒子に弾けて消え、そしてまた形を成す。

「これは……」

新しく形成されたIS装甲はまだうすぼんやりと光を放っている。それはさっきまでの実体ダメージがすべて消え、それどころかより洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか……一次移行!?」
 あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?

さっきのウインドウに書かれていた『初期化』と『最適化』が終わったというのは、つまりそういうことらしい。

これでやっと、この機体は俺専用になった。

改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

そして何より変わったのは、その武器だった。

——近接特化ブレード・《雪片式型》。



日本刀から生まれたようなその刀身は、刀より反りのある太刀に近い。鎗にはわずかに溝があり、そこから呼応するように光が漏れ出ている。妙に機械的なそれは間違ひなくIS装備として作られたものであることを示していた。

それに何より、その名前だ。

——雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前も。あの人はいつでも俺の姉だ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは——

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？ あなた、何を言ってる——」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが出来では、格好が付かない。そう、あの格好いい千冬姉が格好付かないなんて、冗談もいいところだ。しかも、笑えない。

「とうか、逆に笑われるだろ」

「だからさつきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

その弾頭を再装填したビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角形直

線機動だ。しかも射撃型ビットよりも速い。だが——

（見える……！）

右手を握りしめる。応えるように、低い機械音を鳴らす《雪片》。使い方ならわかっている。千冬姉に隠れて何度も見た試合の映像。そこでどう使っていたかを覚えている。

ギンッ——！

横一閃。両断されたビットは、けれど慣性のまま俺の横を通り過ぎて、そして爆ぜた。

爆発の衝撃が背中に届くより速く、俺は再度セシリアへと突撃する。機体の瞬間加速度、センサー解像度はさつきまでの比じゃない。圧倒的に使いやすい。

「おおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪片の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

（いける……！）

セシリアの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

——が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

……え？

「あれ……？」

たぶん俺は全力で「なんで？」という顔をしていたことだろう。向き合ったセシリアも、ぼかんと口を開けて同じような表情をしている。

そしてそれは、第三アリーナに詰めかけていたギャラリーも、ピットで試合を見守っていた箒、山田先生もだった。

ただひとり、千冬姉だけは「やれやれ」という顔をしている。

何が起こったかわからないまま、試合は終了して、結果俺は——負けた。



「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わって、俺は馬鹿者から大馬鹿者になっていた。すげえ嬉しくないランクアップだった。ダウンでないのが千冬姉らしいと言えば千冬姉らしい。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればアイエスを起動しろ。いいな」

「……はい」

頷く。頷くしかないよなあ……。あんな大見得切って負けりやあさあ。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいな。はい、これ」

どさっ。どさっ。どさっ。どさっ。目の前のこれはなんだ？ IS起動におけるルールブックと書いてあるが、『アナタの街の電話帳』じゃないのか？ すげえ分厚い上に、一枚一枚がめちゃくちゃペラ紙なんだけど……。何ページあるんだよ、これ……。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

敬う気持ちのない命令だった。半分が優しさで出来ているという錠剤を見習って欲しい。というかこの人、俺が守る必要があるのか……？

「帰るぞ」

はい、出ました。俺の周りの優しさ欠乏症人物ナンバー2。名前は箒って言うんだけどね。俺の幼なじみなんだけどね。

俺は重い腰を上げて、寮への道のりを歩いた。

「……………」

「な、なんだよ？」

横に並んでいると、さっきからじろじろと箒が俺を見てくる。また珍しい動物でも見つけたのか？ 俺という名の。

「負け犬」

ぐあ。なんだこいつ。死人をHP1で蘇生して装備なしでダンジョンに送り込む神父か？ ちなみに値段は超ぼったくり。「悪魔は人の中にいる」とはよく言ったものだ。そしてまさか俺がその体現者を目撃することになるうとは。

これはあれか、新章突入、急転直下、怒濤の展開、あのライバルが味方になって再登場、敵は死んだはずの協力者、世界の命運は君に任せた。——いや任せんなよ！

「任せんなよ！」

「なに？」

「何でもない……」

大事なことなので二回言ったんだが、箒に睨まれるくらいだったら自重すれば良かった。本当に大事なことは目には見えないって、昔のエッセイストが言ってた。「今日は箒に睨まれたから、四月九日、箒記念日」——なんつって。

「今、私のことを何か馬鹿にしたか？」

「してない」

「なぜしゃべり方がおかしい」

「おかしくない。これ、普通。中南米では日常茶飯事」

「ふう……」

すらりと抜きましたよ竹刀。なんだ、こんなところで素振りか？ 真面目なヤツだ。でも箒、体を鍛えることと体を休めることは同義。体を動かすだけが修行じゃないぞ。

バシーン！

「いってえええっ!? な、なっ、なあっ!？」

「馬鹿がいたので叩いた」

なんだその、『雨が降っていたので傘を差した』くらの言い方は。そんな日常的に暴力を使っているのかよ。日本の治安はどうなってしまうんだ。

「お前はあれか？ 人斬り包丁か？ それとも歩く暴虐か？」

「もう一発いくか？」

「……ごめんなさい。黙ります」

うむとうなずいて、竹刀をしまう箒。恐山より恐ろしい女だ。……まあ、恐山って別になにか恐ろしいものがあるって訳じゃないんだけどさ。

「……………」

「……………」

俺と箒、黙々と歩く。話題がないわけではないのだが、俺はみっともないことに今日の敗北を引きずっていて、箒に話しかける気分じゃなかった。

こういうときはとりあえず風呂に入りたい。あの湯船につかってぼーっとする感じは他の何でも味わえないと思うんだが、前に五反田にそう言ったら『ジジくせえ』と言われた。わびさびのわからないヤツだ。

(ん？ そういえば俺の隣にいるのはわびさびの塊みたいなやつじゃないか)

「おお、箒ならあの感覚がわかるかもしれない。なにせ『江戸時代の人です』と言っても外国人六割は信じるからな。情報元・俺調べ。」

「一夏」

「ん、なんだ？」

あれ、向こうから話しかけてきたぞ。これが噂うわさに聞く以心伝心というやつか？ 便利だな。携帯電話より遥はるかに便利だ。しかも月額無料。たまらぬね。

「その、なんだ……負けて悔しいか？」

「そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そ、そうか。それなら、いい……」

何がいいんだ。俺が負けたことか？ ひでえやつ。

「あ、明日からは、あれだな。あ、ISの訓練もいれないといけないな」

言葉が続ける箒は、なぜだかどうにもよそよそしい。そわそわしているというか……。

「で、結局箒は教えてくれるのか？ ISの操縦」

「む、無理にとは言わないぞ。なんなら、千冬ちふゆさんに教えてもらった方がいいのではないか？」

「いや、千冬姉はイヤがるだろ。それに、えこひいきっぽく見られてもイヤだしな」

「そ、それなら先輩にでも教えてもらってはどうか？ 一日の長というものは、やはり重要だぞ」

さっきからどうにも話を逸ちらそうというか、変なところに持って行きたがるな箒は。しかも気のせいだろうか、なんで俺をちらちら見ながら言うんだろうか。まるで何か期待しているみたいに見えるぞ。

「まあ、箒がイヤだって言うなら他を当た——」

「い、イヤとは言っていない！」

突然大声を出されたもので、俺はちょっとびっくりした。箒も、自分の剣幕けんまくに気づいたのか、ハツとしてたたずまいを直す。

「そ、その……コホン。い、一夏は私に教えて欲しいのだな……？」

「そうだな」

少なくとも他の女子よりは気が楽だし。束たばねさんの妹だからISに詳しいだろうし。

「そ、そうか……。そうかそうか。なるほどな。ふふつ、仕方がないな」

なんで急に嬉しいそうにするんだろうか。何かいいことでもあったのか？

しかもよほど嬉しいのか、しきりに髪をいじっている。長いポニーテールの一部を指先に絡めてはほどくを繰り返している。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

特別に、をとても強調された気がする。

でもまあ、実際ありがたい。この先も女子に負け続けるとなると、俺の男としての矜持きんぢは確実に死ぬ。今でも半分死んでるのに、完全に死ぬ。半死から全死にだ。

「では、明日から必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」
「おう」

どうせ入る部活もない（全部女子部しかない）し、ちょうどいい。
大体、千冬姉に恥をかかせたままではいられない。なんとしても今より強くならなくては。

「ところで箒」

「うむ、なんだ？」

おお、上機嫌だ。俺は先刻から抱いていた疑問を素直な気持ちで投げかけてみる。

「さっきからトイレに行きたいのか？」

バシーン。竹刀の音が響いた。



サアアアアア……。

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとしたセシリアの自慢だ。しゅっと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルには引けを取らないどころか勝っているくらいである。



胸は同い年の白人女子に比べると幾分慎ましやかではあるが、それが全身のシルエツトラインを整えている要因でもあるので本人としては複雑な心境らしい。しかしそれも白人女子と限定すればの話であって、日本人女子と比較すれば充分どころか大きい位だ。

その胸にシヤワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽つていた。

（今日の試合——）

どうしていきなり一夏のシールドエネルギーがゼロになったのかは未だにわからない。

けれど、あの最後の一撃が当たっていたら、どうなっていたかはわからない。

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

（わたくしが勝ったのに……）

けれど、腑に落ちない。なんだかすつきりとしれない。

（——織斑、一夏——）

あの男子のことを思い出す。あの、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることのない眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった……）

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにいられたなかった。

そして、アイエスが発表されてから父の態度は益々弱いものになった。母は、どこかそれが鬱陶しそうで、父との会話自体を拒んでいるくらいがあった。

「……………」

母は強い人だった。女尊男卑社会以前から女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だった。けれど、憧れの人だった。

そう。『だった』。両親はもういない。三年前に、事故で他界した。

いつも別々に過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのか、それは未だにわからない。

一度は陰謀説がささやかれたが、事故の状況はともあつさりとそれを否定した。越境鉄道の横転事故。死傷者は百人を超える大規模な事故だった。

とてもあつさりと、両親は帰らぬ人になった。

それからはあつという間に時間が過ぎた。

手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者から守るためにあらゆる勉強をした。その一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。両親の遺産を守るため、即断した。第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜された。稼働データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そして——

出会ってしまった。織斑一夏と。理想の、強い瞳をした男と。

「織斑、一夏……」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

どうしようもなくドキドキとして、セシリアはそっと自分の唇を撫でてみる。水滴に濡れた形のいい唇は、触れられることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

「……………」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

——なんだろう、この気持ちは。

意識をすると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流は。

——知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

——知りたい。一夏の、ことを。

「……………」

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いていた。



翌日、朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。暗い顔をしているのは俺だけだった。俺だけだったのだ。

「先生、質問です」

挙手。質問は手を挙げてしよう。基本だ。

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは——」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。様になってるが、いやもう正直それはいいや。——ていうかなんで辞退してんだ？ しかも、なんか妙にテンション高いというか……ああ、いや、こいつはいつもそうか……いやでも何だ？ 昨日までの怒ってる感じもないし、むしろ上機嫌に見えるんだが——なんで？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方ないことですわ」

くっ、反論できない。事実負けたからな。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

しまして？

「ク一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

ほほう、なんとというありがた迷惑。——ん？ あれ？ 今俺のこと名前で呼んだ？

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんは」

だから商売にするなっつーの。というかクラスメイトを売るな。

「そ、それですわね」

コホンと咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。いつもと違うポーズなのは何か意味があるのだろうか。あるような気がする。それが何かはわからないが。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ——」

パン！ 机を叩く音が響く。立ち上がったのは箒だった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

な、なんだなんだ？ 『私が』を特別強調した箒は、異様に殺気立っている瞳でセシリ

アを睨んだ。

（って、そんな目で見たらまた相手がビビるだろうが）

——けれどどうしたことか、先週は怯んだセシリアも、今日は違った。正面から受け止めて、視線を返している。それどころかちょっと誇らしげだ。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」してねえー。

「え、箒ってランクCなのか……？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

怒鳴られた。ちなみに俺はBらしい。といっても、これって確か訓練機で出した最初の格付けだから、あんまり意味はないって千冬姉が言っていたような——

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いて行ってセシリア、箒の頭をばしんと叩いた千冬姉が低い声で告げる。

さすがは元日本代表にして第一回世界大会の覇者、凄味が違う。ふたりはさすがごと席に座った。凄味と、さすが……なんつって。

バシン！

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

出席簿で叩かれた。千冬姉、知ってる？ 出席簿って表紙無茶苦茶硬いんだぜ。俺も今

知っただけだ。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優秀を付けようとするな」

さすがのセシリアも千冬姉に言われては反論の余地がないらしい。何か言いたそうな顔をしていたが、結局言葉を飲み込んだ。

「代表候補生でも一から勉強してもらおうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

うーん、千冬姉職場ではこんなにしつかりとしていたのか。かなり意外だった。塩味が足りないとぶつくさ言っていた人と同一人物とは思えない。

そういえば俺が寮で暮らすようになってから千冬姉は家どうしてんのかな。ていうか無人じゃないか？ 週末に一回見に帰らないとダメだな。ってそういえば千冬姉、洗濯ちゃんと自分でしてんのかな。ずっと俺にやらせてたけど。しかし、せめて下着くらいは自分でネットに入れてくれると助かる。中に埋もれていて、生地が傷んだら怒るのは千冬姉なんだし。それくらいは自主的にやってくれよ二十四歳社会人。

バシン！

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシン！

「すみませんでした」

「わかればいい」

こうして善良な市民は暴力に屈するのか。なんとという理不尽。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと（俺を除く）クラス全員一丸となって返事をした。団結はいいことだ。ただ、俺にとってもいいことであればよかったなと思う。心から思う。



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！